
Feマン

馬宮茂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Feマン

【Nコード】

N4667E

【作者名】

馬宮茂

【あらすじ】

漣家に忍び込んできたタリウムはテツがどのような存在であるかを伝える。そして彼はテツに仲間になるように語り掛ける。金属人間という名の者達の争いが始まる…。

第1話 「てつとてん」

いつか見た光景は、悲鳴に彩られたものであった。

川沿いの道路に座り込んでいた自分。腰が抜けて立てなくなるほどの衝撃が目の前に広がっていた。

顔に返り血が飛んでいた。握られた拳にべっとりと血が付いていた。制止の声など気にも留めずに、彼はそいつを殴り続けていた。

その時の彼の顔を何と言うのだろうか。

震えが走る手を必死に握り締めた。

冷酷な瞳の彼が…微かに、笑っているようだったから。

F e マン 第1話 「てつとてん」

「お疲れ様です」

「おう、お疲れさん」

ざんばらの黒髪の、長身の少年が古ぼけた工場を後にする。
その少年を見送った、若い男に声をかける者が居た。

「よう、おつかれ」

「おう」

「言われてた装置は出来上がってんだな？」

「ああ、もうばっちりよ。にしてもとんだ物好きだよな。こんな古ぼけた工場を買い取るうつてんだから」

「仕掛けもごろうじろ、ってな。…さて、明日からどうっすかな」

「仕事探せよ。と、あの坊主も同じくな」

「あいつ、新入りか？高校生ぐらいの」

「ああ、何でも高校を中退して働いてんだと」

「中退か。問題でも起こしたのかな」

彼の背は普通の16歳と比べて頭一分、おおそにして30cmほどついと高い。一見すると背ばかりが高く見えるのだが、その実は彼の身体は頑健に出来ていた。

高校中退もこの高い背が原因であり、やけに目立つ上外見は弱そうなものだから同年代の不良にケンカを売られることも度々ではなかった。その度に彼は相手を病院送りにしていた。その素行が学校側にばれて、彼は退学処分を言い渡されている。

「……」

普段の素行に問題があるわけではない。ただ、彼は少し頭のネジが緩んでいるところがあると言うのか、常人とは何か、精神に違いがあった。

その証拠に数時間コンビニの角に座り込んでいることもあった。大きな身体を縮こめるように座っている彼の姿は非常に不気味であった。

線路沿いの道を独り歩き続ける彼の背後に、一人の人影…そして。

足元に二つの死体。

「轍^{てつ}」

先刻の彼の名を読んだのは女性の高い声だった。

彼、轍を呼び止めた目の大きなロングヘアの少女が深い青色の制服に身を包んで轍を見上げている。轍は振り向いて、僅かに眉を吊り上げた。

「元気にしてた？」

「辿子^{てんこ}か」

少女の名は京葉^{けいよう} 辿子。

夕方の線路沿いの道、その道の至る所にタンポポの黄色い花が咲いている。

「今から何処行くの？」

再び前を向いた鉄に従うように辿子は笑った。

「今から飯だよ。ラーメン屋」

「またラーメン？相変わらず偏ってるね。野菜も食べなきゃ駄目だ

よ」

「別にいいだろ」

「だーめ」

辿子がくすくすと笑うと、轍は先ほどまでとは打って変わって柔らかい表情を浮かべていた。どうやら二人は友人関係にあるようだ。

「あれは…」

そんな二人の様子をふと見とめた、辿子と同じ制服の、眉のきりりとした女の子。

「梅木…」

梅木とは轍の苗字のことだ。

目を細めて、背の高い轍の背中を追ったこの少女は何ともいえない表情になっていた。

彼女は震える右手で震える左手を握り締めている。それは何かを押さえ込んでいるようにさえ見えた。

「カガクー、何やってんの？いこ」

「え、うん」

カガクとはこの少女の名前である。あまりに現実離れた名前だと笑ってくれればいい。

ともかく、そのカガクは友人に従って、もう一度視線だけを、駅の方へと歩いていく轍の背中を追った。

だが、その時には轍と辿子の姿は何処にもなかった。

そのラーメン屋は駅前の道沿いにあった。
テール席二つとカウンター席の店内にはまばらな客、端のカウンター席には轍がしょうゆラーメンを味わっていた。その隣、先ほどまで辿子が座っていた…と、言っても今辿子は店のトイレを借りているのだが。その席に、誰かが座る。

「おっちゃん、味噌ラーメン」

「あいよ」

「…ところで、なあ、君」

「……」

轍は生気の無い瞳を声の主に向けた。
主の男は人懐っこい笑顔を浮かべている。切れ長の目がさらに細く、日に焼けた顔が眩しい。細面の顔だが優しそうな好青年と言っていだろう。

「いいバイトがあるんだ。俺と一緒に、ある場所に来てくれるだけでいい」

「……」

「まあ、気持ちちは分かる。信じられないもんな」

彼は自分の頬を指で掻きながら、苦笑を浮かべた。その表情にやましいところは轍から見ても微塵も無い。

「わかった。で、金は？」

「おお、話分かるな。これだ」

彼はジーンズの右ポケットに強引に納められた財布を取り出し、くしゃくしゃの1万円を轍の前に差し出した。

「とりあえず前金で1万円。仕事が終わったらもう1万円だ」

「そんなに？」

「ま、気にすんなよ。大事な時間を買おうってんだからそれぐらいはするさ」

「大事な……」

「時間は取り返せないぞ。その為にも、楽しむにゃ金が必要なんだろ」
「……」

男は黒の短髪を撫ぜながら、目の前に運ばれてきた碗のラーメンに手をつけ始めた。

「にしても、美味いなあここのラーメン」

「ありがとよ、兄ちゃん」

「……」

肥えた店長が嬉しくてしょうがないといった様子で笑っている。しばらく、二人はラーメンにかかりきりになった。

「て、轍。誰この人……」

か細い、おずおずとした声が轍と男を振り向かせた。

「誰、彼女？」

「ただの幼馴染だ」

「あつはつは、照れんなよ」

男はふと、何かに気づいたような顔になった。

「あ、そついや名前もまだだったな。須見^{すみ}だ。よろしくな」

轍と辿子を交互に見ながら、へらへらと笑った須見は最後に辿子を見据えた。

「ちょっと悪いが、この兄ちゃん借りてくぞ」

「え、どこに？」

「そりや秘密だ。君のようなお嬢さんには刺激が強すぎる場所だからな」

「……」

無然とした顔で辿子が須見を睨む。睨んだかと思うと、須見の隣に腰掛けて外見にも分かる膨らんだ胸を精一杯そらした。

「私も行きます！」

その言葉を発した途端、須見の目つきが極端に冷え切った。

「……ん、まあいいか。だけどお金は払わないぞ」

ふと視線を外した須見の横顔を轍は疑念の表情で見ていた。
その轍のほうをぎょろりと須見が見咎める。

「俺はさ、ある人に頼まれてんだ。お前を連れて来いってな」

「…誰だ」

「それは言えない。義理もあるんでね、悪く思つなよ」

スーブまで飲み干した須見が袖で口元を拭って、コップの冷水を飲み干す。

「さ、行こうぜ。着いて来いよ」

5月の夕暮れの風は涼しくも何処か肌寒い。

轍と辿子が肩を並べて歩き、その少し前を須見が先導していた。
ふいにポケットから取り出した携帯電話を開いて、名前を確認した後通話ボタンを押し、耳に運んだ。

「…情報通りだ。このままで行く」

『決心しろ。それが必要だ』

「わかつてるよ」

微々たる会話のみで須見は携帯電話を切った。その顔には陰りが見える。

携帯電話を折り畳んで、須見は乱雑にポケットにしまい込んだ。ポケットから青い四角形のストラップがはみ出ている。

その様子を眉をひそめて轍が見届けている。

須見の表情に何かを感じ取ったのだろうか…ふと後ろを振り返り、

付いて来ていた辿子を睨んだ。

「辿子、お前は帰れ」

「うつん、一緒に帰ろうよ。なんか怖いよ……」

「そういうことじゃない。これは……」

「……お前らは仲がいいんだな」

轍の言葉を遮る様に、振り返った須見が声を張る。轍を見据えて、

「だが、お前は世間から疎まれている」

「……」

「え……」

「お前さえ居なければ……そんな視線をあゝの街の至る所から感じたぜ」

踵を返した須見の背中を睨みつけたままの轍の傍で、辿子が戸惑ったように二人を交互に見る。

「さ、ついたぜ。ここだ」

路地裏道に面した入り口から見上げる錆だらけの壁。

トタン製の壁を切り取るように窓が一つ二つ、それからこちらも古ぼけて錆びている扉が待ち構えている。

「轍が働いてる工場？」

「……」

「ここは製鉄所だつてな。小さな工場だ」

須見が二人の前に立ち扉を押した。

すんなりとそれに扉は従い、道を空けた。

（鍵がかかっていないのか…）

規則として、仕事の終了後はこの工場では工場長が鍵をかけて帰ることになっていた。

しかし今、須見はすんなりと扉を開けた。

「ほら、来いよ。お金が待ってるぜ」

「お金？」

「そーいうこと」

須見と辿子が先に中に足を踏み入れていく。

轍が無言で後を追うが、その表情には暗雲が垂れ込めている。

25メートルプールに、液体状の鉄が満タンに満たされている…と
言えば分かりやすいだろうか。

異常な熱気に包まれた工場内の気温は異常に高くなっている。

辿子がそのどろどろの鉄の上の鉄橋から下を恐る恐る覗き込む。

「うわぁ、あつつい」

「あんまりそっち行くと危ないぜ。なあ」

「ああ…」

轍は曖昧にうなずいた。

「でも、こんなところで何のようなの？」

「そーだなあ、お嬢ちゃんのブラ紐が空けることかな」

「え！？ど、何処見てるのよ！」

「あつはつは、眼福眼福」

「おい、そんな話を気にきたわけじゃないんだろっ」

「そーだな、じゃあそろそろ本題に入るか」

へらへらした須見の顔がふっと引き締まった。

「お前は一つ、殺人を犯している」

「えっ……」

「……」

「教えてやろうか？まあその必要も無いか。理解しているんだろっ？」

あまりの突然の言葉にがらりと変わる空気。張り詰める息苦しさが充満している。

「お前はスリの現行犯を捕まえた。その時、…殺した。制止の声も聞かず、ただ殴り続けてな」

それは、轍と辿子が10歳の頃。

商店街の一角で悲鳴が上がった。

出口から右の道へと逃げていった男を轍は躊躇することなく追いかけた。

その当時少年、といえる体格ではなかった轍は瞬く間に追いつき、後頭部を殴りつけた。

たまらず崩れ落ちた男の上に馬乗りになった轍は、有無を言わず

顔を殴り続けた。

じきに男の体が全く動かなくなっても、轍の身体は止まらない。制止の声は届かない。それどころか止めに入った人が殴られる始末だった。

殴って、殴って、殴り続けて…血溜まりが出来るほどに、その時、駆けつけた警察に捕縛されたのはスリの男よりも轍のほうであった。

その後スリの男は病院で亡くなった。喉が血で塞がってしまったことが原因らしい。

轍は、少年法に守られ、スリを捕まえようとした、そう解釈されて3ヶ月ほどで解放されていた。彼に対する風当たりが強くなったのはこの頃からだ。

須見が両手を横に広げる。

「さあ、罪に報いる気は？」

「…何が言いたい」

「過去の自分と決別して生まれ変わる気は無いか？お前の力を貸して欲しい」

「断る」

絶え絶えに言葉を紡いだが、須見の言われぬ迫力に足が勝手に後ずさる。

腰に当たるものを感じて轍は背後を振り返る。眼下に、どろどろの鉄が大量に蠢いている。

鉄柵が今、鉄の命を助けたのだ。

「まあそう言うだろうな…まあどの道…お前はここで終わりだよ」
「やめてっ」

辿子が声を張り上げた。

「いい加減にしないと、警察呼ぶわよ！」
「へえ、助けるのか？こいつを」

須見は皮肉めいた笑みを口元だけに浮かべた。

「こいつのために、俺を止めるだけの価値があるのか」
「止めるだけの価値…！？」

轍の顔がゆがむ。その顔が辿子の彼に対する信頼を破壊していくのだった。嘘がばれたとき、轍はいつもこんな…苦しそうな顔をしていたから。

『俺は…殺してない…』
『そうだよな、やつぱり！きっと、病気とかなんだよね』

幼いころのその嘘を半ば、考えるのを止めたように飲み込んでいた。その考えのすぐ先に足を伸ばせば…轍と辿子は今、共に居なかったはずだ。

事実絶対だ。その真実に辿子は足を踏み入れてしまった…。

（価値なんて無い）

そう思うことは自然だったといえる。

（轍は嘘をついて…）

『殺してない…』

（嘘を…）

殺していない、と言う事に非は無い。

轍の数少ない理解者、辿子が自分から離れていくことを何度も考えたのだろう。

失いたくない、そんな思いが轍の心にあった。

「てんこ…」

「……」

轍は顔を酷くゆがませたまま、鉄橋の一部、床の赤く塗られた場所まで後ずさった。

「嬢ちゃん、このボタンを押してみな」

言われるがまま、須見に投げ渡されたボタンに指をかける。

今の辿子に言葉は通じない。

妄信ともいえる感情の中、裏切られたその事実だけが彼女の胸を強く締めつけていた。

だから、押す。

押した。

何かがはめ込まれるような金属音が連続的に鳴り響いた。轍の足元が動く。赤い床の部分が地面に対して傾いていく。急激な速度に宙に放り出された轍の体は…

「てん」

震えた声が遠くの辿子の意識を取り戻した。

『てん、ありがとう。俺：信じてくれて』

『何言ってるのよ、当たり前じゃない』

あの日。

轍が笑っていたことを辿子は思い出した。あの時の声がよみがえる。安心した声、震えながら、伝わってきていたこと。

辿子が顔を上げる。

放り出された、轍の瞳が辿子の瞳と絡む。

絶望の瞳が辿子を見ている。荒んだ、冷え切った、そして震えた轍の瞳…

「てつ」

刹那の事であった。

再び辿子が我を取り戻したときには、肉の焼ける音が響いていた。

須見が身を乗り出して底の液状の鉄を見下ろしている。

「……」

「あ、ああ…ああああ」

ボタンが手のひらから滑り落ち、からからと音を立てる。

「人殺しの末路…俺も気をつけよう。さて」

迦子が喉をぐると鳴らした。目の焦点は定まらぬまま、震える口が絶え絶えの言葉を紡いでいる。

「違う…私じゃ…私なんかじゃない…」

「ボタンを押したのは誰かな」

須見はそう呟いた。

「それは……あなたが…」

「お前は人殺しだ。誰に言われてやったとしても、これは消えない。消すことは出来ない…」

「あ、あ………」

「失せろ」

迦子がかすれた叫び声を発しながら、狂ったように走り去った。

それを気にも留めず、須見はジーンズのポケットから指輪の箱を取り出した。

その箱を開くと、中身に輪が二つ紡がれた金属のようなものが収められている。

須見はそれに手をかけた。

「…あれもつけとくか」

思い立って、須見は財布から一万円札を取り出してその中に金属を包み込んだ。

「今度こそ、上手く行ってくれよ」

それを、先ほど轍が落下した場所の上に手を伸ばし、指を離した。

一万円札に包まれたまま、二つの輪は落ちていく。
かすかな水音を立てて、落ちた。

「15秒…ふーん、ちょっと遅かったか」

時計の針は進む。起こらない物事に関わりあいを見せることは無い。

「失敗か…もう何度だ」

須見の口元には苦笑が広がる。

「F e マン、生まれてくれないのか…？」

どくん

「ん」

心臓の鼓動のような音が周囲に響く。須見はもう一度身を乗り出す。真っ白に熱を持つ液体の鉄が気泡を吐き出し始めた。

「来た！」

転瞬、須見は身を引いた。その瞬間、輝く光と共に薄緑色の煙が立ち上る。

立ち上った煙の中で目を凝らす、須見が見たもの。全身を金属に覆われた、人型の、

「F e マン」

確かにそれは、人間ではなかった。

第1話 「てつとてん」 (後書き)

初投稿ですね、よろしくお願いいたします。

第2話 「自分を求めて」

ここは『めぞん三石』の一室。

壁には有名なグラビアアイドルが水着姿で艶めかしいポーズを取ったポスターがぶら下がっている。

6畳の室内の真ん中に据えられた膝までの高さしかない机がある。その机の上に大量に置いてあるスーパ一の袋の中には、キャベツなどの野菜、豚肉や牛肉鶏肉、また魚など数多の食材が入っている。その机に向かって、東側にドアがある。北に小さなベランダがあり、南西に備え付けられた箱型のテレビが静かに鎮座している。それで、西側に、鈍色のぎざぎざとした髪の左右対称の整った顔の少年がズボンに2本の線が入ったジャージ姿で腰掛けている。

そしてキッチンでがさごそ動き回る180cm程の頑健な男が白色がくすんだ色の冷蔵庫の扉をボタンと閉じた。上に『山人』と黒字でプリントされたTシャツ、下にボロボロのジーンズを穿いている。

「喉渴いてねえか？麦茶飲むだろ？」

この男の名前を、須見^{すみ}という。

「……麦茶」

何かにつけて全てが平均といったような顔の、淡い緑色の瞳の少年がポツリと呟いた。

「まさか、知らないわけ無いだろ」

精悍な顔立ちのがっちりとした顔つきで彼はにっと笑っている。

須見は小脇に工具箱を抱え、机まで持ち出してきた。
そのまま机の前に腰掛けると、机上の袋を端に寄せて向かい側の少年に見えるようにその工具箱の中を開いてみせた。
その中にはごろごろと黒色の金属片が転がっている。

「何だ」

「何って、鉄だよ。金属の」

工具箱は上げ底になっていて、中身は工具箱の容積ほども無い。

「とりあえずぼろ鉄だけど……」

「……」

「わかるか？食ってみるよ」

「……」

「うーん、やっぱりレバーとかの方がいいのかな」

「……食べてみる」

少年は言われたまま手を伸ばし、ボロボロの鉄片を口に運んだ。

ボリボリッボリガリゴリ

想像が及ばないだろうが、鉄を噛み切る音が聞こえる。

「……悪い、なんか不気味だ」

「……」

「F e マンの主食なんだと。聞いた話だが」

「……」

「美味いか？」

彼は静かに首を横に振った。

「そりゃそうだな。よし、次はこれだ」

頓着する様子もなく須見は続いての作業に取り掛かった。

次に鈍色の髪の少年の前に差し出されたのは、ほかほかと湯気を立てたお持ち帰り用の牛丼だった。

少年はちらりと須見の目を見て、それに須見がうなずく。

箸を手に取り、少年は牛肉でご飯を包み口に運ぶ。

「美味しい？」

「…うん」

「よしよし、人間と同じだ」

嬉しそうに笑った須見はリモコンを手にするとテレビの電源を点けた。

「まあ、ゆっくりしろよ。漫画読むか？あ、小説もあるけどどっちがいいかな。それとも映画にするか？」

「…あなたは俺を知っているのか」

「まあ、な。知りたいか？」

「……」

「そりゃ知りたいよな。よし、質問があるなら答えるぜ」

言いながら、須見の視線はテレビ番組に注がれている。人気コメンテーターが得意げに話すのを呆けた表情で見ていた。

「俺の…名前は？」

「名前。えーっとな、テツ…だ。てつ」

「……テツ」

少年、今後テツと表すが、彼にはまるで実感の無い名前だった。記憶の抜け落ちた感覚は一般人にはとても理解できるものではない。与えられた名前が自分のものとなるには赤ん坊から物心付くまでの年齢が必要なのだ。

「F e マン、って」

「…全身を、材料の鉄で覆われた人間のこと…らしい。俺も詳しいところは知らないんだけどな」

「俺がそうなのか」

「そうだな、例えば」

言うや、須見の右手に握られた銀製のスプーンがテツの右手を強かに打ち据えた。

響いたのは人間の皮膚をたたいたときの打撲音ではなく、金属音である。

「痛いかな？」

「……」

また静かに首を横に振るテツに須見もまたうなずいた。

机上に適当にスプーンを放ると、木のテーブルとスプーンがけたたましい音を立てた。

「外見はわからないようになってるが、中身は鉄なんだ」

「…俺は普通とは違うのかな？」

「そうだな」

テツは視線を落とした。今は、食いさしの牛丼から湯気は上がっていない。

「今日はちょっと付き合ってくれ。俺と一緒に『博士』のところへ行く」

「博士？」

「そうだ。お前の作り方を知ってる人だ。上手く聞ければ…難しいけど、教えてもらえるぞ色々」

言葉を濁した須見に視線を向け、テツは一つだけうなずいた。

「俺はもっと、いろんなことを知りたい」

「だろーな。じゃ、行くか？」

「ああ」

「その前に、腹ごしらえしてからだ。ほれ食っちまえ」

「……」

「飯が美味いと嬉しくならあな」

窓から見える青色の小さな鯉のぼりがはためいている。

深青の学生服を着た三人組の女子高生が駅に続く道を歩いている。話の起点は何処だったか定かではないが、とにかくも彼女たちのうちの一人がこんなことを呟いたことから始まっているのだろうか。

「そういえば、あの男って何処行っただろうね」

「そーそー、あの角にいつも座ってたよね？気持ち悪かった」
「なんか怖いよね」

「……」

「でもさ、もう死んじゃったんでしょ？だったらもう怖くないな」

「行方不明じゃなかった？どっちにしてもまあ、居なくなってくれてよかったって思うよ。殺人者と一緒におんなじ街に住めないもんね」

「止めようよ、そんな話」

この三人の中の一人、カガクが苛立たしげに二人を制した。そんな話をするのも嫌だと言わんばかりだ。

「でも…確かこの辺にいつも座ってたよね？ここ通る度に怖かったんだよ」

「そうそう、でも、もういないんじゃないかな心配すること…」

三人がコンビニの角に差し掛かったとき。

「あっ」

「……」

そこに腰掛けていたのは彼女たちが噂していた人物ではなかった。

なかったが、それにしてもその人物は異様を極めていた。

鈍色のがちがちの髪の毛、淡い緑色の瞳が異常だ。右手で電車の切符をつまむ様に持っている。

彼は上目遣いの眼差しを微動だにさせず、彼はカガク達を見つめている。

「何か用なの」

無垢な瞳に見つめられていた中、カガクが突然、前に踏み出した。

「……」

丸々とした目が、カガクの見下ろした冷ややかな瞳を見つめ返している。

「ね、ねえカガク。止めようよ……」

「なんか怖いよこの人……」

口々に言いながら、カガクの服の袖を少女たちが引つ張る。

「ごめんなさい」

先に頭を下げたのは、意外と言うべきか、男のほうだった。再び顔を上げた彼の顔には何の表情も浮かんでいない。

呆氣にとられたカガクが何も言い出せないで居たとき……

「悪い悪い、待たせたな、行くぞテツ。ん、何だ？」

手に薄茶色の買い物袋をぶら下げた須見から声がかかった。眉をひそめて須見がカガク達を見やる。須見がその時、はっとした

表情になった、一瞬後にテツが腰を上げた。

「いこう」

「ああ……ま、いいか。切符無くしてないな？」

「ああ」

一人は真っ直ぐに、一人は何度か振り返りながら、改札の向こうに遠ざかっていく二人の背中を、三人の女子高生が呆然と見送った。

「何あれ……」

「変なの」

「……」

電車の中。

「まあ、何なのあの髪の色」

「酷いわねえ、道徳なんてあったものじゃないわ」

テツがそちらを振り向いた。

「まあ、外国の人よ」

「でも最近からーこんなくつつてあるじゃない？」

「まあ、嫌だわ」

「テツ、ほっとけ」

「髪の毛、この色は不自然なのか」

「まあ、そだな。普通日本人は黒色だ」

「黒……」

「言っとくが、お前のは成分的に鉄に近い。染まらんぞ」

「……そうか」

「ま、海苔でも食べばどうかな」

「のり？」

「焼き海苔知ってるだろ？味付け海苔でもいいぞ」

「……………」

事務机の向こうに、豪華そうな肘掛の無い椅子に腰掛けた、目が糸のように細く痩せ顔の白髪の老人が長年着込んだ所為か黄色にくすんだ白衣を身にまとい、考え事をしているようだった。

事務机の上にはノートパソコンや膨大な数の資料が山積みになっている。見渡せば戸棚にも様々な科学書、分厚いファイルが収められている。それらが部屋の圧迫感をただならぬものにしていた。

「よお、来たぜ」

須見が重厚な場の雰囲気似つかわしくない軽い挨拶をする。

「そいつが報告の」

「テツってんだ。な」

テツが頷いたが、

「名前：お前が決めたのか。どうしてもよいことだ」

きつく言い放して、

「お前の原料は何だ」

テツに高圧的に言葉を飛ばす。

「……」

「口がきけんのか？」

「あーいや、鉄だよ。そのまんま」

「ふん…名前で判明するのは得策ではないな」

呻くようなくぐもった独り言はテツの耳によく届いていた。

「じゃあそろそろいいか。とりあえずこいつ生まれただから何にもわかんないんだよ」

「須見。しっかりと見張れ」

「わあーってるよ。テツ、あんま気にすんなよ。こついつ偏屈爺さんなんだ」

「ああ」

「待機させておけ。何かの役には立つだろう」

「あーそうかい。それじゃあな。いくぞ、テツ」

テツが一つだけ頷いた。

「…待て、私の娘の家に行け。男手が足りんと零しておったわ」

それを見咎めたのか二人の背後から重苦しく苦々しい声が飛ぶ。須見は振り向かず、手をばたばたと振って部屋を出て行った。

テツだけが振り向いた。

「あなたは俺が何なのか知っているのか」

「答えは自分で探せ」

間髪入れず飛んできたその言葉に、テツは何も言えず部屋を後にするしかなかった。

再び研究室に静寂が戻った。

ため息を吐きながら先を歩く須見の背中へ、テツが言葉を飛ばす。

「今度は何処へ？さっきの博士の娘の家か？」

「そうだ。待機なら俺の家でもよかったんだけどな、爺さんの命令じゃしょうがねえよ」

テツは須見の隣へ足を進めた。

「あの博士は何者だ」

「あれはお前のような体の人間を作った人だ」

「俺のような」

「そ。この世界、お前と同じ様な体の人たちはたくさん居るぞ」

須見のその言葉を聞いたテツが顔を上げた。

「本当か」

「お、嬉しそうだな？」

須見が楽しげに聞き返すと、テツは視線を真っ直ぐ前に向けた。

「……不安、というのか。こんな気持ちは」

「ん？」

「……俺は独りだ……そう思っている」

テツの胸中に根ざすものは、言いよつの知れない孤独感。記憶がこつそり抜け落ちているのだから無理も無いと言える。

須見はそんなテツを見やり、少しの苦笑を浮かべた後、にこりと笑ってテツの頭を優しく叩いた。

「だあほ、とりあえずは俺が居るだろ」

「……そうか、とりあえずは……」

「とりあえずとか止める！」

傍から見れば兄弟のような二人の姿だった。

「ほれ、見ろ」

不意に立ち止まった須見が一軒の家を見上げた。

テツと須見、二人が見上げている建物は庭付きの一戸建て、特別広いわけではないが2世帯住宅といっても差し支えないほどの大きさを持った、壁が白塗りで黒色の屋根が夕日に赤く染まっている。

「よし、着いたぞテツ」

「ここが博士の娘の家か」

「そうなんだが……説明くさいなあ」

「？」

「ま、いいだろ。とりあえずしゃんとしてれば気に入ってくれと

思っぜ」

そこまで言った須見は、何かを思い出したように大口を開けた。

「あ、でも…うゝん、なんか…」

「どうした、須見」

「ん、気にするな」

言いながら、須見はテツを見やる。

淡い緑色の瞳が須見を見つめ返している。

（気にしてもしょうがない。ここはこいつの真っ直ぐさに賭けてみよう）

須見も腹を決めた。

「とりあえず人間関係は初めの印象だ。ここがしっかりしてれば後はどうとでもなる」

「初めの印象だけで全部決まるのか」

「…そういうもんなんだ。で、挨拶の仕方は分かってるか？」

「…分からない」

「ん、誰でも最初はそうだ。いいか、初めましてってちゃんと言っただぞ」

須見がテツに念を押した後、家のインターホンの呼び出しボタンを押した。

カラン、と楽観的な音が聞こえたしばらく後、磨りガラスの向こうにうごめく人影が見えた。

「はい、はいはいはい」

扉が開いて、中から姿を見せたのは、口元にわずかなしわが見える大きな眼の40代の女性だった。

眉がきりり、としているが表情はじつにおっとりとしている。可愛い、という形容がしっくりくるのではないか。

須見が軽く頭を下げると、彼女は明るい笑顔で小走りに駆け寄ってきた。

「お久しぶりね、須見君。何年ぶりかしら」

「そうっすね。ここんとこ忙しくて」

「元気そうなら大丈夫よ。まったく、お父さんは何にも教えてくれないし」

「あはははは…あ、それはそうと。こいつが電話でお話した奴です」

「まあ、その子が？」

「はい、しばらくお願いします。ほれ」

須見に背中を叩かれたテツがその拍子に一步前に出た。

テツはじつと女性を見つめる。

「…初めまして」

「いえいえ、こちらこそ。えーっと、何君、かしら」

テツの人間のものではない瞳をじいつと黒の瞳が覗き込む。

「テツ」

物怖じすることなく、テツははっきりと告げた。

「あら、テツ君ね。私は漣^{ささなみ}よ、漣^{ささなみ}陽子^{ようし}。よろしくね」

「……」

「それじゃ、後よろしくお願いします」

「はい、お気をつけて」

「テツ、迷惑かけんなよ」

「わかった」

須見は軽く手を上げると、大きく欠伸をしながら漣家を後にした。

「不安？」

「ああ」

「まあ、素直ね」

「ああ」

並んで立つ二人、中肉中背のテツより少しだけ背の低い、陽子は微笑ましげに笑った。

「ここを自分の家だと思って、ゆっくりして行ってね」
「……」

テツは黙ってうなずいた。

玄関の左手にリビングに続く扉が、右手には開いた襖の奥に仏壇が鎮座している。

「この家にはね、私の娘も一緒に住んでるの。仲良くしてあげてね」

陽子がなぜか、困ったような笑顔を浮かべた。

「どうしてそんな顔をする」

陽子はすこし、目を丸くした。それから笑顔でテツにうなずいた。

「あの子……あなたのような人、嫌っているから」

「俺のような？」

不意に、玄関の扉が開いた。

「ただいまー」

「……」

「え………」

背中にテニスバッグを背負った深い青色の制服の、眉のきりりとした少女が啞然とした顔でテツを見つめる。

テツもその視線を外さず、じいと少女を見る。

「あら、お帰り。今日は遅かったのね」

「う、うん。部活……なんだけど」

「そうだったわね、いつものことだった」

「……お母さん」

「ん？」

「だ、誰？」

少女がうつろたえながら、テツを指差す。

ああ、と納得して、陽子はテツに笑いかけた。

「自己紹介してあげて」

「……テツ」

「…もういいの？ほら、自分はどこが魅力的だとか、どこから来たのかとか…」

「それはわからない」

「そう。でも挨拶ぐらいはしてあげてね」

「……」

「……」

「…初めまして、テツだ」

言いなれていない所為か口から漏れたような言葉だったが、少女の止まった時間を進めるには十分だった。

「あ、こちらこそ！さ、漣 カガク…です」

名乗った名前、カガクは慌てて頭を下げた。すぐに彼女が顔を上げると、陽子が楽しげに胸の前で手を打ち鳴らした。

「はい初めまして。さ、そろそろご飯だからね。カガク、早いところ着替えてらっしゃいな」

「ちよつと、待ってよ」

その場を離れようとした陽子の腕をカガクが引きとめた。

「誰？何で家に居るの？」

「今日から新しい家族になるのよ。仲良くしなさいね」

陽子の言葉の途端、カガクは戸惑いの表情を一転、眉根を寄せて歯を嚙んだ。

「……また、あいつなの」

「あいつって言わないの。おじいさんでしょ」

「また私たちの都合なんて無視して！面倒ごとはこっちに押し付けるのよ！」

「カガク…その都合にテツ君は関係ないのよ」

「大有りよ」

荒ぶる気持ちを抑えられないまま、カガクは二人の様子を見つめていたテツの眼前に足を運び、一部始終を微動だにせず見ていたテツを睨み付けた。

「早いうちに出て行って。あいつに、ふざけるなって言つといて」

「カガク」

「ふん…きゃっ」

わざとテツに肩をぶつけるようにして進もうとしたカガクは、予想以上の反発に壁にぶつかった。

「……な、何よ」

カガクは慌てながら、テツが力を入れたものと思い、強情に突き飛ばそうと手を伸ばした。

みしっ

「いつ……」

その伸ばした手から軋むような音が響いたかと思うと、カガクは再び壁に背を打っていた。

「なっ、何…！？」

「カガク、いい加減になさい」

「っ、ふん」

腕をさすりながら、カガクは走り去るように2階へと駆け上っていった。

「……」

「気にしないで。あの子、おじいちゃんを嫌っていてね……」

「おじいちゃん……博士」

「そうよ。漣博士……あなたのこと、電話してきたのよ」

「俺のことを？」

「ええ。あなたのようなタイプは知らないことが多いだろうから世話をしやれって」

「タイプ……」

陽子は一つため息を吐くと、なぜか悲しげに微笑んだ。

「……もうやめましょうか、こんな話。しばらく自由に家を探検してくれてもいいわよ。晩御飯が出来たら呼ぶからね」

「わかった」

「うん」

リビングへの扉へ消えていく陽子の背中を見送った後、テツは改めて周囲を見回した。

玄関の隅のボロボロのダンボールに、野球のバットやグラブ、ボール、またテニスラケットや、綺麗に磨かれてはいるが微細な傷が目立つサッカーボールなども乱雑に詰め込まれている。

壁が窪んだ所には小物を置けるように作られた木の台が備え付けられている。そこに置かれた黒縁の写真入れに入れられた、一枚の写真。

「…知ってる。これは写真だ…」

テツは呟くと、その写真入れに手を伸ばした。

「陽子…と、誰だ」

写真に写る、満面の笑顔の若い頃の陽子の姿。そして、長身の、口元に僅かに微笑を浮かべた男、その男と陽子の間で、黒髪の、こちらもきりりとした眉の女の子が笑っていた。バックに写った桜の木が何とも美しい。

テツにとって印象的だったのは、そこにいる人、陽子の過去の姿。直感的にそう悟ったテツは、無言でその写真入れを元に戻した。

「……俺は……」

昔があるんだろうか。

夕暮れの太陽は山の向こうに沈んでしまった。

日も山の向こうに沈んだ、春の夜は未だ冷たい風が吹く。

(…轍…轍…！)

足取り重く、背中まである黒髪もぼさぼさの、深い青色の制服に身を包んだ少女が視線を足元に落としたまま歩いていく。弱弱い少女は何処を目的としているわけではなく、ただ道の進む先に足を合わせるだけだ。

少女の頭の中は…幼馴染の、最期の姿のみ。

『てん』

あの声が、少女の脳裏にこびり付いて離れようとしなない。

どうして自分はそのボタンを押したのか。どうしてあんなことになったのか。考えれば考えるほど、少女の表情は悲痛に、苦痛に歪んでいく。

(信じて、あげられなかったから…私が轍を…私だけだったのに…)

冷静な考えなど今の彼女に出来るわけもなく。

いよいよ足取りがおぼつかなくなってきた少女、辿子の身体がふらりと崩れ落ちようとしたとき…

「よいしょ」

前からやってきた、シスターの格好をした女性が辿子の身体を支え

た。

「どうしたの？大丈夫？」

優しい声が辿子の頭上に降り注ぐ。

辿子が女性の胸の中で顔を上げると、優しげな笑顔で女性が辿子に微笑みかけた。

「い、いえ。何でも……ない……」

辿子の潤みきつた双眸から、涙が零れた。一瞬、はつとした女性は、頭のシスター帽を脱ぎ去った。外の空気に零れた、黒に近い灰色の髪。

「辛いことがあったのね…神はあなたの全ての罪を聞き届けますよ」
「……かみさま…？」

「ええ。あなたに反省の心があるのなら、神はあなたを許すでしょう」

微笑んで、細くなった目の奥に、深赤色の瞳が輝く。

「う、うう…う、うあああ」

顔をくしゃくしゃに歪めた辿子の身体を抱きしめた女性は、優しく背中を撫で続けた。

悲しみの笑顔を隠そうともせず…。

第2話 「自分を求めて」(後書き)

はい、第2話です。いよいよ登場人物も増えに増えてきましたが、なんとか動かせるようにがんばります。

第3話 「漣家の居候」

東京都六王子市、田間ベッドタウン。

その中央付近の住宅街の一軒を、漣家が保有している。黒い屋根に白い壁を持った、ごく普通の家である。昨日までその家の住人は、漣陽子、そしてその娘カガクの二人だけだった。

今日、夜になったその日に二人のほか、一人の少年が家の中を歩き回っていた。

鈍色の短い髪の毛、取り立てて目立つところも無い顔の少年は淡い緑色の目をきよろきよろと動かし、家の中を探索していた。上下に赤色のジャージ、白の2本線が入ったものが彼の出で立ちだ。

階段を上って、2階に辿り着く。

ふよふよと頭を振り、周りを見渡すテツの目に、長方形の木片に『カガク』とカタどられた札が架けられていた。

銀でめつきされたノブがついた扉の前までテツがずかずかと近づいた。

「……」

テツはノックもせず扉のノブを回した。

当然、室内にはカガクが居る。着替えの最中らしく、ベッドにきちんと畳まれたパジャマが見える。思わぬ侵入者にカガクは呆然としていた。

両手でたくし上げられた制服の下、白色のブラジャーに隠された小ぶりの胸が見える。

スカートはベッドの上に敷かれている。白色の下着も太ももへそ

もテツの目線に晒されていた。

部活をやっているから引き締まった身体をしている。その体が、みるみる赤くなっていく。

常人なら慌ててドアを閉めるところだが、カガクにまるで構わず、テツはずかずかと部屋の中に入り周囲を見回していた。

「き……」

数秒後、我に返ったカガクはたくし上げていた制服を下ろし、動きだけ冷静にスカートを穿きなおした後、息を大きく吸い込んだ。

「きゃああああああああああああああっ！！！！！！」

F e マ ン 第3話 「漣家の居候」

「どうして奇声を上げる？」
「えっ…」

顔を真っ赤にしたカガクはテツの冷静な言葉に出鼻を挫かれた。

「どっ、どうしてって…恥ずかしいから」
「裸を見られることがか？」
「そ、そうよ」

カガクはスカートの裾をしわが出来るほど握り締め、テツの質問に答えていく。

「人はみんなそうなのか？」
「そりゃあ…見られて嬉しい変態はいるみたいけど…って、何言わせてんのよお！！！」
「今の何が悪かった？」
「ぐ…」

私は何をしゃべっているんだ。そんな思いがカガクの胸中を巡りに巡っていく。

ここでタイミングよく、カガクの悲鳴を聞きつけたのか、陽子がひよっこりと顔を出した。

「どうしたの、カガク」
「勝手に入ってきたのよ、こいつ！」

カガクに怒れる指先で指差されたが、テツは押し黙ったままだ。何が悪いのかすら分かつては居ないだろう。
陽子は少し困った笑顔で、諭すようにテツに話しかけた。

「あらら……いい？年頃の女の子の部屋に軽々しく入っちゃ駄目」

「わかった」

「いいから早く出てけーっ！」

娘の怒声に陽子はテツの手を引き部屋を出ようとした。去り際、カガクが乱暴に放り投げた時計がテツの頭に当たった。だがカッシーンと、綺麗な金属音のみでテツは反応しなかったのを、カガクは呆然と見送った。

「……何なのよ、あいつ……」

どつと疲れが出てきて、カガクがベッドに座り込んだ。それと同時に裸同然の姿を同年代の男子に見られてしまったということがカガクの顔をさらに真っ赤にして、

「うああ〜」

ベッドに倒れこんでゴロゴロと悶えるのだった。

カガクの部屋の前の廊下で、陽子がテツの頭を心配そうに覗き込んでいる。

「平気？瘤にはなっていないけど……」

「大丈夫だ。痛みは無い」

陽子の指がテツの硬い髪に触れる。

「まあ、それにしても随分硬い髪質ね…毎朝大変そうね」

「毎朝？」

「だって、寝癖が無いものね。毎朝セットしてるんでしょう？これ」

「……せつと？」

「え？」

「人の部屋の前で話し込まないでくれる」

低い呻く様な声で部屋から出てきたカガクは、白い長袖のパジャマを身にまとっている。

「カガク、ご飯」

「わかってる。…」

「……」

不機嫌な顔つきのカガクが横目でテツを睨む。

テツはそれに対して真っ直ぐ見つめ返してくる。

「…見た？」

「何をだ」

カガクは一瞬、言葉を詰まらせた。

「…だから、その…着替え」

「見た」

テツの厚顔無恥といえる発言に、カガクの右手が自然に動いた。その右手は思い切りテツの頬を張った。が、赤く腫れ上がったのはカガクの右手のほうだった。カガクの眼に涙が滲む。

「いつ、いたっ……」

「ほらほら、ケンカはそこまで。ご飯ですからね」

それだけ告げて、鼻歌混じりに陽子が階段を下りていく。

カガクは手の平にふうふうと息を吹きかけて、上目遣いにテツを見た。

腫れはおろか赤くすらなっていないテツの頬を見て、表情に怪訝な色が見える。

「……あんたの体、なんか変じゃない？」

「何がだ」

「なんか、妙に硬いような……」

言いさしたカガクはそこで言葉を止めた。

何があつたというわけではない。テツの鉄の様な表情に変化が見られたからでもない。しかしカガクは止めた。

しばらく、向き合った後、テツがカガクの右手を取った。

カガクはテツの突然の行動に慌てた。テツのごつごつした手にカガクの右手が握られる。何時の間にかカガクの右手の痛みは消えていた。

「な、何……」

「あなたは軟らかい」

変わらない無機質な声に無機質な表情だったが、その手先は違っていた。

カガクの右手を優しく包むテツの両手。

カガクはしばらく眼を瞬かせていたが、突然、テツの両手を振り払った。

「……」

テツの横を通り過ぎ、カガクは階下に一目散に下り去っていった。途中、踏み外したのかひととき大きな音が聞こえたが、大丈夫そうだった。

テツは両手を下げると、カガクの後を追うように階段を下りていった。

階段の明かりが、しばらくしてから消えた。

食卓に着いたテツとカガクの眼前に、料理の皿が並ぶ。

一粒一粒の米が立ったご飯まではよい。だが、他の汁物やおかずの中には必ずレバーが混じっていた。

ほかほかと白い湯気を立てたレバーの味噌汁、茶の炒められたレバーと青いニラの色身が綺麗なレバーニラ炒め、煮汁のよく絡んだレバーのしぐれ煮、エトセトラ……

カガクは露骨に表情を歪ませ、テツは僅かだけ眼を見開いた。

「うげ……」

「……」

「嬉しくないの？レバーには鉄分がたくさん入ってるって言う話よ。テツ君、鉄分が足りないって聞いたから」

テツは渡された黒塗りの箸を手にとると、ほかほか温かいレバニラ炒めを口に運んだ。

口の中をもごもごさせていたテツが口を開いた。

「これは美味しい」

「そう、よかった」

二人を遠巻きに眺めていたカガクが眉をひそめて、手に取っていた朱色の箸を箸置きに戻した。

「…ご馳走様」

「あれ、食べないの？カガク」

「うん…食欲無い」

食卓の椅子を戻してから、カガクはリビングに向かいリモコンを手にとると、テレビの電源を入れた。

食卓とリビングは一部屋で、リビングから食卓をはさんでキッチンが見える。

リビングの白いソファにだらだらと座り込んだカガクはニュース番組で明日の天気を見ていた。

「お母さん、明日晴れだつて」

「よかったわね」

キッチンに戻った陽子がなにやらブリキのバケツを胸に抱えている。卓上のレバー料理に箸を伸ばしていたテツがふと見上げると、陽子はそのブリキのバケツを机の上に置いた。どすんと重苦しい音がカクの目線も集中させる。

「須見くんから預かったのよ。テツ君って凄い特技を持つてるのね

え」

「何それ」

カガクが足早にやってくると、バケツの中身を覗き込んだ。中にはゴロゴロとたくさんの鉄塊が入っていた。

「鉄？」

「でも、こんなもの、ねえ」

「……貸してくれ」

テツはバケツの中から鉄塊を一つ取り出して口元に運んだ。

「あ、ちよつと」

カガクが制止するのに構わず、テツは鉄塊を口に放り込んだ。ボリボリと鉄材を噛み砕く音（想像が及ばないだろうが）が聞こえる。

その様を、カガクは眼を点にして、陽子は思わず手を打って見ている。

「まあ…凄いのねえ」

「…ちよつと、口開けて」

言われたとおり、テツは噛むことを中断して大きく口を開いた。カガクがその口中を覗き込む。そして、口をへの字にする。

「うわ…ほんとに噛んでる…」

「もういいか」

「…うん」

ボリボリの音が続いている。しばらくしてテツが口を開いた。

「不味い」

「でしょうね…あ、そうだ。今度からテツくんのだけ鉄粉にして料理に混ぜてあげるわね」

「それは美味しいのか」

「うん…ちよつと血生臭くなるかな？やってみるけどね」

「わかった」

「…私のは別にしてね」

カガクが呻くように言う。

「わかってるわよ。あ、そうだコーヒーは？」

「こーひー？」

「ええ。砂糖いくつかしら」

テツはそのまましばらく動かなかったが、じきにひとつだけ頷いた。

「……ああ。要らない」

カガクがテツの言葉を聞いて、少し仏頂面になった。

「まあ、大人ね。カガクもコーヒー要るでしょ？」

「うん。…お母さん、私も砂糖要らない」

「へえ…残しちゃ駄目よ」

「わかってる」

くすくす笑いながら陽子がキッチンに戻っていく。

テツはその背中を眺めてから、すつくと立ち上がるとカガクの点けていたテレビに視線を移した。

「何よ、見たい番組でもあるの？」

テツの背後からカガクの声が飛んでくる。テツは振り向かなかった。

「いや…懐かしいと思ったんだ」

「懐かしい？」

「……上手く説明できない」

テツはすつと歩いていくと、先ほどカガクが座っていたソファアの逆側、テレビに近い位置に腰を下ろした。背筋を曲げず、真っ直ぐ胡坐をかいている。

「……」

カガクもそれ以上何も言わず、ソファアに浅く腰掛けた。

しばらく、アナウンサーがニュースを伝える声だけが流れている。

「はい、お待たせ」

陽子が運んできた苦いブラックコーヒーにカガクが顔をしかめる中、テツは無表情にコーヒーを一気に口に流し込んだ。

「大丈夫？ ホットなんだけど」

「大丈夫だ」

涼しい顔で言うテツに、カガクはますます毒々しい目つきになる。

「…ねえ」

陽子がお風呂を沸かしに行った後、カガクはテツに話しかけた。テツがカガクを見る。

「あんたって、どうしてそうデリカシーってもんが無いの」

「…デリカシー？」

「で、…もういいわよ」

コーヒーカップを手にしたまま、カガクは少し身を乗り出した。

「今日、駅のコンビニにいたよね」

「ああ。須見が寄るというから待っていた」

「須見…って、あいつの仲間の？」

「あいつ？」

「ほら…漣博士の」

「わからない」

テツは視線をテレビに移した。

「俺は須見が博士の知り合いということしか知らない」

「ふーん、何にも分からないんだ」

「つまりはそうだ」

「否定しないのね」

「なぜそんなことをしなければならぬ」

「……いちいちむかつく奴」

カガクがコーヒーカップを机に置いた。

「大体、なんでうちにくるの。親のところにも帰ったらいいじゃ

ない」

「いない」

「え……」

思わぬ返答に、カガクはテツの顔を見た。彼の視線はテレビの画面に注がれたまま、表情に変化は無い。

「親というのは俺を生んだ人のことを言うんだろう？知らないんだ」

カガクは視線を伏せ、申し訳無さそうに言葉を紡いだ。

「ご、ごめん……」

「何故謝るんだ？」

その言葉に思わず顔を上げたカガクには、こちらを向いた彼の顔がきょとんとした顔に見えた。

「だって」

「俺は迷惑と思ってはいないけれど」

「……」

カガクは……テツを真っ直ぐ見た。

「やっぱり、変」

「そうか」

「二人とも、お風呂沸いたわよー」

「はーい。……先、入るね」

「あなたの家だ。権利はあなたにある」

「……そういう言い方嫌い」

「……すまない」

カガクはしかめっ面を浮かべて、足早にリビングを後にした。
その場に残ったテツの背後から、陽子ののんびりとした声が聞こえてくる。

「カガクと仲良くしてくれてありがとうね」

「あれが仲良く見えるのか？」

「ふふ、そうね」

テツとしては普通の質問だったが、陽子は微笑んでいる。

「ご家族が居ないって聞いたけど…どうしたのか、知らないの？」

「知らない。俺に家族は居ない」

「あなたがいいのなら、しばらくここに居なさいよ。その内に見つかるかもしれないし。ね？」

「迷惑ではないのか」

「ええ。家族が増えれば増えるほど楽しいものね」

笑顔の陽子を直視していたテツが視線を落とした。

「どうしたの？」

「こういうときは、お礼を言うべきだろうか」

「そうね」

テツは陽子に向き直って、

「…ありがとう」

それだけを言った。陽子は微笑んだ。

「どういたしまして。さ、家族の一員になったからには色々手伝って貰わないとね」

「労働か？」

「難しい言い方だけど、そうね。洗濯物を畳むのを手伝って」

「わかった」

素直にテツは陽子の傍へ行き、洗濯物の山の中から適当に衣服を引っ張り出す。

テツの手にカガクのジーンズが掴まれた。

「そういえば、そのジャージ、須見くんのかな」

「そのようだ」

「家ね、君のと同じぐらいの服が何着かあるの。後で見せてあげるわね」

「助かる」

この日の一日前、夜。F e マンが生まれた日。

「…外国の方、なんですか？」

「育ちは日本よ。生まれはイギリス」

辿子は教会の2階の一室に連れられて来た。与えられた白いネグリジェに着替え、ベッドに腰掛けている。きちんとした物で比較的新しいものようだ。

壁にシスターの頭巾をかけた見目麗しい女性は黒に近い灰色の髪を後ろで束ね、ゴムひもで縛った。

「私の父が日本好きでね。それが高じて日本人の母を奥さんにしたのよ」

「…ということは、ハーフですか？」

「珍しいかしら」

「あ、いえ。そんなつもりじゃ…」

「いいのよ。ちょっと意地悪だったかな」

明るく笑う彼女の笑顔に釣られ、辿子も笑顔になった。

「コバルさん…ありがとう」

「いいえ、私にはこれぐらいしかできないけれど……」

言葉の後の沈黙が何よりも語る。コバルと呼ばれた、この女性は、辿子の隣に腰掛けた。

「…大切な人なのね」

「はいっ……」

「大丈夫よ、大丈夫…」

コバルに抱きしめられた辿子の頬には、涙の筋がはっきりと見える。コバルが触れた辿子の肩から、彼女の動揺が伝わる。

「どうか、変な気は起こさないでね」

「変な…？」

「いえ、いいの。それよりもう寝なさい…疲れたでしょう」

そう言って、コバルは部屋の明かりを落とした。暗闇の中、窓から

街頭の明かりが幽かに飛び込んでくる。

「はい……あの」

「ん？」

暗闇の中、辿子の顔はしっかりとコバルの顔を見つめた。

「本当に、ありがとう」

「……おやすみ」

コバルの姿は広大な空間の大聖堂にあった。幾重にも並べられた長いすに一人腰掛け、彼女は掲げられた十字架に目を向ける。

（強い娘……いいえ、もしかしたら……気丈に自分を覆い隠しているのかも……しれないわね）

コバルが強く目を閉じる。

その目蓋の裏側に、何の光景を宿しているのだろうか。

（……弱気になっては駄目。弱気になっては）

脳裏にその言葉をたたきつけたコバルは、腰のポケットから黒色の携帯電話を取り出した。少し操作したあと、それをかきあげた髪の下から露になった耳に当てる。

「……もしもし、私よ。……ええ、そう。一人……ねえ、あの……」
会話の中、思い立ったような表情でコバルが言葉を告げようとしたが、電話越しの話し相手にそれは適わなかったようだ。

「うつん、何でもないの……ええ、ごめんなさい……それじゃあ……ふふ、ありがとう」

穏やかな笑みで携帯電話の通話を終えたコバルは、しばらく十字架を見上げていたが、じきに立ち上がると胸の前で十字を切った。

「……お許しを……って言うのかな」

「じゃあ、おやすみなさい」
「……」

それから一日、その日の夜、テツに用意された部屋は8畳ほどの広さの立派なものだった。

西側に窓がひとつ、北側にも窓がひとつ。

テツが横たわるベッドも決して新しいものでなく、木製のもので所々染みのような汚れがついている。

これらの汚れはこのベッドが長い間使われていないことを意味していた。陽子はこのことをテツに平謝りしていたが、テツは別段気にする様子も無かった。

陽子が寢床の準備をしていたとき、ふらりとやってきたカガクがどこか不満そうにそれを見守っていたが、風呂から出てきたテツが現れるとすばやく自分の部屋に戻って鍵をかけた。
苦笑する陽子とテツが残されたことになる。

そんな少し前のことを思い出しながら、暗闇の中でテツの両目が輝いている。

じきに暗闇の中の輝きは消えていた。

テツの頭の中には、記憶を辿る道筋があつた。

彼にとって一番古い記憶が今朝の須見の部屋である。

そこからここまで、鮮明な記憶が彼の頭には刻まれていた。しかし、彼の頭には一日のこと以外の記憶も確かに存在する。

特に目覚しく感じているのは、ひとりの少女。カガクではない。少女の顔ははつきりと思い出せないで居た。

その少女のことをテツが思うと、テツは心の中にやりきれない思いを感じていた。

テツの心はこの感情を知らない。だが頭の中にはある。

思ひは、憎悪に近く、愛情にも近く、そして憧れにも近かった。だがその何れでもなかった。

テツに表情上の変化は無い。だが、その心は焦りを感じていた。

「……何も分かっていない」

「知りたいか？自分の役目が」

暗闇に再び、テツの瞳の輝きが浮かび上がる。

その瞳はカラカラと音を立てて開いた窓の方向へ向いていた。

「……さつきからそこに居たな。誰だ」

闇夜の風にカーテンがたなびいている。

身を起こしたテツの眼前に、窓枠に腰掛ける若い男の姿。
男は不適な笑みを浮かべてテツの目線に応えていた。

「俺はタリウム。話し合いだよ、F e マン」

第3話 「漣家の居候」(後書き)

第3話です。漣家の二人とテツの交流を書きました。テツとカガク、陽子がこういう人達だとわかっていただけたら幸いです。また辿子とコバルという女性のこともし書きました。二人のことも含めて、F eマンの本格始動ですね。頑張ります。

第4話 「V S T I（タリウム） 金属人間」（前書き）

若干過激な描写があります。ご注意ください。

第4話 「V S T I（タリウム） 金属人間」

5月の夜に湿った寒々しい風が部屋の中に吹き込んでくる。

テツはベッドから跳ね起きると、真っ黒なロングコートに身を包んだその男の目を見た。

透き通った緑色の瞳が怪しく輝いている。

ともかくも、テツは目の前の訪問者に質問した。

「F e マン？」

「お前のことだろ？そう聞いているぜ」

言いながら窓枠から腰を上げて、男は部屋の中に土足で踏み込んできた。

「まだ生まれて一日だってな。まあ決断のときというのはいつだって唐突だし、思い切って今決めてみる！…のも悪くないと思うぜ」
「何の話だ」

テツの警戒心を感じ取ったのか、男はふんと鼻を鳴らした。

「俺達の仲間にならないか？」

言葉の端々に高圧的な態度を感じながら、テツはあくまでも冷静だった。

「俺は原子番号81、タリウム T I。それが『金属人間』の証だ」

「…『金属人間』」

「俺やお前のような存在さ。ま、もつともお前は少し俺たちとは違っているがな…」

「……」

「お前は最も効率の悪い方法で作られた。成功率の低い、分の悪い…だが、その人間を材料にする方法は全ての金属人間の基本と言える」

タリウムの言葉の一部でも、テツの頭に届いているのだろうか。彼にしてみればあまりに突拍子の無い言葉だといえる。

「俺達は全世界に、お前のような金属人間を作りたいと考えている」

「…俺達、ということはあなた以外にそういうことを考える人がいると？」

「そういうことだ。ま、俺はその歯車のひとつ、みたいなもんだがね」

「何故…その金属人間とやらを増やしたい？」

「その前にお前、自分の力がどれぐらいあるか知ってるか？そうだ

な、100キロの鉄材なんか軽々と持ち上げられるぜ」

「……」

「つまり動くブルドーザーと考えていい。人間の社会を手助けするために、金属人間は必要だ。そうだな、『成長増進剤』と言い換えてもいいかもな」

「なるほど」

「わかってもらえりや何よりだ。で、金属人間を増やすためにはお前が要るんだよ」

「俺が？」

「さつきも言つたろ？基本なんだよ。基本が無ければ応用はあり得ない。図面がなきゃ機械は組み上げられない。理論が無ければ実践は無い」

タリウムと名乗ったこの男が発言した内容をテツが噛み砕いている。

「全ての金属人間の指標だ。それがお前の役目だ」

「……」

「で、どうだ？」

「…基本といったが。あなた達は俺をどうする気だ？」

「痛いことはねえよ。お前は大事な見本だからな」

「嘘だな」

テツの言葉ににやついていたタリウムの口元が引き締まる。

「…何？」

「何故嘘を吐く？」

「嘘、なわけねえじゃねえか。そんな必要なんで」

「嘘、なんだな」

「あなたは嘘を指摘されると悟られまいとして真顔に戻る。1回目

だけではわからなかったが、2回も続くとはつきりする」

「…何が言いたいんだ？」

「心臓の音だ。嘘というのはわかりやすいものだな」

テツはタリウムの胸を指差した。

「心音が平常のものと少し違ってきた。その後すぐに元に戻ったが。何故嘘を吐く？つまり、俺に害が及ぶということだな」

「…お前は表情が変わらないな」

「不安に思ったりだ、そんなことねえのかよ」

「あつたとしても、今ではない」

「俺は『核』を取りに來ただけだ！平穩にいきやあそれはそれでよかったんだ……もとからてめえを生かすつもりも無いんだ。生きて連れ帰ろうが殺して連れ帰ろうが、核さえ無事ならそれでいいってんだよ！」

「本性を見せたな」

右手が街灯の光を受けて輝き、テツが視線をタリウムの右手に向けた。裾から銀白色の金属が素手にまわりついて、鋭利な槍のようなものを形どった。

「お前の体にある核を奪えばそれでいい。死んでもらうぜ…！力の使い方もわからないお前に、勝ち目は無い」
「……」

事実、タリウムは簡単に、僅かなうちにテツの命を奪うことができると確信していた。
それ故にこれから、タリウムの行動は読み易い。

タリウムが右手を引いた動きに合わせるテツ。一步、踏み込みざま肩をかすめたタリウムの一撃をはつしと掴み取る。金属の摩擦音が響く中、テツは掴んだタリウムの腕をいなして懷にもぐりこんだ。

その一瞬、テツの右拳が右から正確にタリウムの顎を捉えた。金属同士のぶつかる鈍く高い音が響く。

崩れ落ちたようにタリウムが倒れたのを、テツは直立不動のまま眺めていた。

だが捉えたただだった。その場に崩れ落ちたかに見えたタリウムは膝を立てて起き上がってきたのだ。

(…こ、こいつ…もう力を使えるのか…馬鹿な、そんなことが…)

タリウムの顎はテツの拳に従って右側に歪んでいた。そこは銀白色に輝き、人の体のもものではなくなっていた。

テツの一撃で、冷静な思考力とここまでの余裕を奪われてしまったタリウムは狼狽していた。

反して、テツの体に大きな異変は見られない。硬く握り締めた拳は肌色を保ったまま、それにタリウム金属の欠片が僅かにこびりついている。

『予測不可能な事態に陥っても慌ててはいけない。それは最悪だ』

タリウムの脳裏を過ぎるのは、彼の憧れの人の言葉。狼狽していたタリウムの顔つきが変貌していく。

「侮ってはいけない…理解したぜ。侮っては…」
「……」

タリウムまでもう2歩の距離。テツが一步を踏み出したとき、タリウムの親指が何かの小物体を弾いた。それは一直線にテツの顔、特に口元へ。その礫をテツは手で払った。テツの手のひらに残る確かな手応え…。タリウムの口元がにいと吊り上る。テツは手のひらを眺めた。タリウムが弾いた礫がめり込み、だんだん皮膚の奥へと進行していく。

「これは…」

その隙をタリウムは見逃さず、礫を幾重にも放った。計5発、3発までテツは手で防いで見せたが一つは頬に、一つは素足の甲に張り付いた。

そしてそれぞれ、テツが弾いた手の物も全てテツの体にめり込み始めた。鋭い痛みがじわじわとやってくる。

「それはタリウムの欠片。毒の欠片さ」
「毒」

「毒は血管に到達すればあつという間だ。循環し、臓器に染み渡るまで1分も無い。そうなると視力障害、知覚麻痺、痙攣、呼吸麻痺…」

「……」
「致死量は1g。耐えて見せるか？」

タリウムが掲げて見せたその欠片はあまりに小さく、致死量とされた1gを超えてテツの体内にめり込み始めている。だがタリウムが優位に立てたのはここまでだった。

全ての弾痕の場所で異変が生じ始めた。めり込んだタリウムの破片が少しずつテツの体から外に押し出されている。

「おお」

「なっ、何故…」

これにはテツも意外そうな声を上げた。

（通常の金属人間は金属を操る意思が必要だ…その意思と実現の間には、修練経験が関係ある…熟練した者ほど金属の操作が容易になるはず！）

タリウムの思考は急場に即時判断を下せるほど滑らかではない。

「……」

もちろんタリウム金属の礫が一定のところまで潜り込むのをやめていたのは、理由がある。

弾痕のところ、鈍色の輝きが見える。全てだ。

「こいつ、最初から…！」

「要は。お前を先に殺せば良いだけの話だ。1gを受ける前に」

テツの体はまさに、鉄の塊と言っている。

通常皮膚から染み込むはずのタリウム毒が全身金属であるテツにはまるで効き目が無いのだ。

毛細血管の細部に至るまで『鉄製』の、まさにテツは金属人間である。

（と…すれば！全身同じような状態であることは間違いない。後は、

目、鼻、口：そうだ。それしかない！息継ぎの時、必ず呼吸器は顔を出す。その一拍を見切る！口に放り込めば、勝ちだ…！口に…！

タリウムの思考がそこに行き着いたとたん、テツが足を進めた。

まさに鉄の塊といえる拳を握り、タリウムに向かって一直線に歩もうとした。

その出鼻をくじくようにタリウムの指先から礫が放たれる。

テツが弾いた出先の一発を弾いた瞬間、二つの礫がテツの、思わず閉じた目蓋に張り付いた。そしてめり込み始める。しかしこの攻撃がテツに通じないことは確認済みである。

タリウムの狙いは別にある。

（しまった、何も見えない…）

目蓋から奥層を目指そうとする礫にテツの目蓋が固定され、視界が奪われていた。

タリウムは暗闇に囚われたテツの首元を掴み、床に倒した。

右手を全てタリウムに変え、テツの呼吸を圧迫する。そしてテツが口を開いた瞬間、口を手のひらで覆うとタリウムの手のひらから大量の金属片が染み出し、口中に流し込まれた。

「勝った！」

思わず叫んだタリウムの腕を弾き飛ばして、両足を揃えてタリウムの腹を蹴った。

強かに壁にたたきつけられたタリウムはずると床に腰を下ろした。

テツは機敏に立ち上がると、口中の欠片を吐き出した。だがタリウムに入れられた欠片とその吐き出した欠片は明らかに少なくなつて

いた。

「あ、ははは、はははははは」

「覚悟は良いな」

そうテツがつぶやいたとたん、テツが一つ咳き込むと今度は確かにタリウムが注ぎ込んだ欠片全てが吐き出された。タリウムの眼が驚愕に開かれる。

（何故だ！？致死量の何倍ものタリウムを飲み込んでおきながら、こいつ…！）

瞬間、タリウムは信じられないものを見た。

テツの口中が窓から飛び込んできた街灯の明かりを受けて鈍く光っていた。

「き、貴様：食道を鉄で塞いだのか！」

「：飲み込めなかったんだ」

これは無意識の行動だった。テツの体がタリウムを毒物として認識していたため、自己防衛本能によるタリウム摂取を体が拒んだのだ。

（通常の金属人間では、あり得ない…！）

人間が体内において金属を操る力というのは本能で操れるものではない。そんな人間は存在しないからだ。

テツは一度、大量の鉄と混ざり合っているために金属が本能の一部となってしまうている。

「随分と表情が変わるな。愉快なものだ」

感情の色の無い真っ白な声がタリウムの足を一步、後ずさらせる。テツの口元は鉄のように硬く、淡い緑色の瞳がきゅっと小さくなつた。

凍りついたままの顔でテツは言い放った。

「俺はお前に用は無いが、お前に危害を与えられた以上、殺すことにする」

そして再び、拳という鉄の塊を作り出す。

ＴＩの体から一斉に血の気が引き上げていく。テツの瞳を直視したＴＩの瞳が眼の中に溶けていく。

「ま、待て…！」

ＴＩが動揺からなのか、壁に強かに背中を打ちつけた。

微弱な揺れがしばらく、漣家を振動させる。

しかしそんなことに構わず、テツは足を進める。

「入るよ、いい？」

扉の向こうで響いた声がテツの目線をタリウムから外す。

まもなく、部屋の扉をがらりと開けて一人の少女、カガクが眼をこすりながら入ってきた。

「うるさい、何よ、今の音……っ!？」

「いいタイミングだあっ!!!!」

「むぐ…」

「手を出せばこいつの命はねえぞおっ!!!!」

「…好きにしる」

驚愕に眼を見開いたＴＩに羽交い絞めにされた力ガクは、状況が未だ飲み込めず、しかし見知らぬ男に拘束されている事実、動転しようとする気に必死だった。

（こ、これ、何…？誰、なに…！？）

「これ、どういうこと…」

「その男は俺に殺されないためにあなたを人質に取った」

テツの一拍も置かない答えは動転した力ガクの感情をぶんぶん振り回すものだった。

得体の知れない恐怖が力ガクの全身を覆い、顔面から血の気を奪い、唇を震わせる。

「た、助けてっ！！！」

金切り声がタリウムの頬を吊り上げたが、テツは僅か少し眼を見開いたのみだった。

「あなたを助けて、俺に何がある」

「なっ…」

その言葉が再びタリウムの顔を絶望まで突き落とす。
力ガクの顔も、また。

「何かあるのならあなたを助けるが」

「正気か、こいつ…！」

「……」

「無いのか。有るのか」

そう問いかけるテツの眼差しは人間のそれではなく、限りなく機械に近いものであった。

「無い、か」

ミシッ

握り締められた拳から空気の潰れる音が聞こえる。

カガクには死刑宣告にも取れそうだ。

「く、来るな！本当にこの娘を…！」

「どなた…？」

テツの威圧感に圧倒されていたＴＩの背後から、陽子が声をかけた。気が動転していたＴＩが振り返ると、陽子が持っていた懐中電灯のスイッチを押した。

暗闇を照らし出す懐中電灯の明かりが男の視界を一瞬奪い去った。その奪われた視界が完全に蘇ることは無かった。瞬時に反応したテツの体が跳ね、正確にタリウムの頭蓋骨を碎いた。

「ぐわっ」

鈍器で殴ったような音が響く。それだけで男の思考は完全に止まっていたが、テツは止まらず、カガクを男から引き離れた。

「きゃっ」

カガクの体が壁に、荷物みたいに投げつけられる。

テツはそれに聊かも構わず、ＴＩの首を掴んで壁に叩きつけ、その身体に全力の拳を突き入れる。

ドンッ

グチャアッ

テツの拳は胸板を拳型に陥没させた。口からごぼりと黒々と赤い血液が流れ、テツの拳に絡み付いてから、床を濡らす。

突き入れた腕を抜くと、タリウムの体は力なく壁にもたれかかったまま腰を下ろした。

血に濡れた拳を払い、テツは深く息を吐いた。

「カガク、カガク」

あくまで冷静に、陽子はカガクを助け起こしていた。先ほどのテツに振りほどかれ壁に叩きつけられた所為で、カガクは気を失っていた。

「陽子」

突然のテツの鋭い声に陽子が向くと、彼は階段のほうに視線を向けていた。

「どうしたの、テツ君…」

「そのままで」

テツは陽子に振り向いた。

「どうやら同じのがもう一人居るようだ」

「えっ、それって…」

「ここに居て。狙いは俺か、あなた達か」

予断を許さぬ声に、陽子はそれを真実として受け取ったようだ。

「助けてくれるの？」

「…あなたは」

それはテツが陽子のことを好意的に思っているということである。だが陽子は固執して自分のみを守るタイプではなかった。

「……カガクは、助けてくれる…？いえ、もし、カガクだけでも」

陽子にとっての第一は娘、カガクなのだ。

しかしそれに対するテツの答えは、

「カガクが俺にとって何らかのメリットがあるのなら」

「……」

冷たいものだった。

陽子は少し、言葉に困ったようだったが、しかし力強く言葉を継いだ。

「テツ君、お願い。カガクを助けて」

「……あなたは自分の身が心配ではないのか？」

「それ以上に、カガクのが心配よ。人間にはそんな損得勘定だけで動けないこともあるの。テツ君」

「……」

テツは視線を階段の方に向けた。

「階段から一人来る。逃げられるか」

「ベランダから、カガクの部屋に」

「わかった。引き付ける」

テツは床を数回、軽く叩いた。気配の主を誘き寄せるためである。

「テツ君」

「……」

「気をつけてね」

ベランダからカガクを背負った陽子が出て行くのを横目で見送って、階段を踏み鳴らす音が近づいていることに気づき、テツは階段の暗闇に目を向けた。

研ぎ澄まされた空気の中、足音の主は2階に到着しようとしていた。

第4話 「V S T I（タリウム） 金属人間」（後書き）

4話目です。F e マンに接触したタリウムはいつたい何者だったのか？次もなるべく早く書きたいと思います。

第5話 「やり直し」 (前書き)

漣家の居候になったテツはタリウムと名乗る金属人間の襲撃を受けたが、これを撃破。一方後悔に沈む凧子は協会のある人に懺悔をすることになったが…

第5話 「やり直し」

タリウムと名乗る男がテツの手で殺される、10分ほど前の話。

街灯の明かりに群がる小さな虫が確認された。5月であり虫の季節
とは言い難いが、確かに虫の姿がある。閑静な住宅街の一軒、漣家
から10メートルほど離れた、丁字路の街灯の下。

二人の男が夜の暗闇を照らし出す街灯の下で、なにやら話をしてい
る。少しだけ耳を傾けてみよう。

「そろそろかな。じゃ、行ってくるぜ」

「用心しろよ。まだ生まれたてで力を操れないとはいえ、それでも
金属人間なんだ」

「わかってるよ」

軽い口調の男が口に咥えていた煙草をぷつと吐き出し、路面に落ち
た煙草を足でもみ消した。

たったこれだけの短い会話が終わった途端、一人が漣家の庭にふわ
りと飛び込んだ。

残された男は黒いコートを深く羽織りこみ、ポケットからタバコ一
箱を取り出すと、一本の煙草を口に咥えた。

「あれ、ライター何処にやったかな…」

男がポケットをまさぐる前に、街灯の明かりの外、暗がりからふら
りと現れた一人の男がライターの炎を差し出した。彼は裾を余らせ
た衣服を捲くり、浅い青色のジーンズを履いていた。

「おお…何だ、お前か。悪いな」

黒コートの男は差し出された炎に自ら首を近づけた。

煙草の先がじりじりと焼かれている。

黒コートの男はこのライターを差し出した、背が高く、顔、体のやせ細り、釣りあがった目の男に見覚えがあった。

「生きてたんだな。向こうの連中に仕留められたって聞いたぜ」

「へへ…何とか逃げおおせてきましたよ」

「まあ何よりさ」

下衆た笑みを浮かべる男に、黒コートの男は微かに不快感を覚えた。もともとこういう顔をする奴だったが、今日は露骨過ぎる。そう思ったのだ。

そんな気持ちを知らずか、痩せた男は一步、黒コートの男にじり寄った。

「ところで…旦那。今旦那と一緒にいらつしたのが…」

「ああ、タリウムだよ。あの野郎は手柄を焦り過ぎるな」

「まったく…」

黒コートの男は嘲る様な笑い声をあげた。その笑い声を聞いたら、心の極小な痩せた男は、かつてはむきになって反論してきたものだったが、彼は下衆た笑みを崩さなかった。

「へ、言うようになったな。以前はタリウムに頭が上がりなかったじゃねえか」

「……」

「…お前、何か変だな。背が高すぎる…」

記憶の中の彼との食い違いに、黒コートの男が表情を消した。そして次に浮かんだ表情が…

「お、お前は…炭素…」

ぽろり、と黒コートの男の口から煙草が零れ落ちる。

瞬時、彼の腕が黒コートの男の胸を貫いていた。

うねうねと伸びた腕の先が鋭敏に尖り、瞬く間に黒コートの男の息の根を止めた。

その瞬間、黒コートの男の啜えていた煙草が地面に跳ねた。

「もうちょつと情報を聞きだせりやよかつたんだけどな…さて」

声が一転、柔らかで良く通るものになったかと思うと痩せた男の顔が一度、強烈に膨らんだ。ボール状になった顔がしぼんでいくにつれ、この痩せた男の顔はまったくの別人へと変貌していった。

「あいつなら心配ないが…ま、見ておくか」

変貌を遂げた男の顔は、須見という男そのものだった。

同時刻、草木も眠る夜の時間。

ある教会の部屋の中、一室の真ん中を木製のベニヤ板で間じきられている。その壁に向かうように古ぼけた机と椅子が備え付けられている。その机の真ん中に一つのベルが置かれている。壁には丁度辿子が腰掛けたときの目線の高さぐらいに30cm×30cm程度の正方形の隙間が開いていて、その隙間はくすんだ色の赤い布かカーテンのようなもので仕切られ、向こう側の様子は知ることが出来ない。

「さあ、楽にして」

その赤い布の向こう側から、低い男性の声が聞こえてくる。

修道女の服に身を包んだ辿子がその両手を硬く閉じ、膝の上に乗せて椅子に腰掛けていた。幽かに唇も震えている。辿子の後ろに、修道女の衣装にシスター帽を被ったコバルが腕を組んでその様子を見守っている。辿子の背中に注ぐ視線はどこか物憂げであり、また悲しげでもある。

赤いカーテンに遮られた向こう側に、かすかに浮かぶ人影から発せられる声は深く沈むが暖かい。

「迷える子羊…という言い方は良くないな。すまない」

「い、いえ」

「はは…さあ、君の悩みは…」

「……」

声を出さなければという意識が口を開くが、辿子の声は空気を震わ

さなかった。沈黙が場を包み込む。

「ゆっくりで構わない。少しずつ、少しずつ…」

向こう側の人影は少しもたじろいでいない。

辿子は優しく、柔らかな物言いに警戒心が薄れていくのを感じた。

「……わたし、おさなじみを、ころしました」

核心を突いた答え。

「ああ、聞いている。それから？」

「……………それだけです」

指先が熱くなる。それと反比例して心は冷えていく。

辿子は今の言葉で精一杯だった。頭の中に浮かぶ轍の姿と自分の存在を照らし合わせて、感情が暴れようとすることを収める事が彼女の限界だった。

「きみはその罪…どうするつもりだい？」

「えっ……………」

「償^{つぐな}うのか？それとも抱えるのか？置いておくのか？」

「償^{つぐな}いたい…です」

落ち着かない頭の中、辿子の導き出した答えに赤カーテンの向こう側の男はこう答えた。

「償^{つぐな}うというのなら、私はとても良い方法を知っている。君の心に正しい道を、光を照らす方法だ。君がもし私の言うことを信じ、その方法を実践してくれるというのなら」

そこまで一息に語り、彼は一つ息を吐いた。

「君の目前に置かれた『ベル』があるだろうか？」

女神を象った木製の取っ手の先に、鈍く金色に輝く金属製のベルがついている。

「ベル：はい、あります」

「『ベル』、それ続けて2回鳴らして欲しい。私を信用してくれなければそれでもいい。そのときはベルを一回鳴らしてしばらく待ちなさい。選ぶのは君だ」

辿子は体が動かないと実感した。

見守るコバルの眉間に皺が寄る。

「神は、行動を良しとする。それは世界が証明している。君の心を支配するのは君だ。幼馴染の死に報いることを君が君自身に強いことが出来るか？神は見守っている」

男の声が辿子の躊躇いを少しだけ退けた。辿子の指が伸びる。震える指先で掴み取ったものは、女神を象ったベルの取っ手。

チリーン

ピカピカに磨かれたベルの音が静かに鳴り響く。一度。

チリーン

赤カーテンの向こう側、聖書を携えた深遠の黒色の服に体を包んだ男の口元が歪んだ。

「決断はかくも美しい」

気配は確実に近づいてくる。

階段からひょっこり顔を出した須見の姿に、テツは全身から漲らせていた殺気を消した。

「須見」

「よっ、テツ。なんだ、ライオンでも居るのかと思ったよ。あっはっは」

明るく笑った須見の笑顔に、テツは警戒心を解かぬままだった。須見は壊れた人形のように壁に背中をついたままのタリウムに近づき、しゃがみこんでその顔を覗いた。テツは須見の姿をよく見た。

「…下に居たのは須見か？」

「下に居たのは、まあ俺だろうな。何人だ？」

視線を変えぬままの須見の声にテツが答える。

「一人…須見ならいい」

「そつか。あれ、陽子さん達は？」

「ベランダからカガクの部屋へ逃げた。まだそこに居るはずだ」

須見が足をカガクの部屋の方向へ進めようとしたのをテツの声が止める。

「こいつは何だ？あなたはこの人が来ることを知っていたのではないか？」

振り向いた須見はにかりと笑った。

「馬鹿言えよ、お前がここに来たのは陽子さんが呼んだからだろ？」

「そうだ」

「ならいいじゃないか。ほら、さっさと着いて来い」

（…心音が聞こえない。振動は伝わるんだが…）

テツは須見の心音を探ろうとしていたが、それは聞こえない。テツは振り返って、うな垂れたような格好のタリウムの心音が微かも聞こえないことを確認した後、須見の後を追った。

窓は開いたまま外気を通して、カーテンを揺らす。

「陽子さん、須見です。開けますよ」

言い置いてから力ガクの部屋の戸を須見が静かに開ける。微かに金属の軋む音を立て、木製の褐色の扉が開く。

「須見君、テツ君は…」

「ここにいますよ。ほら」

部屋の明かりが照らし出すものは、陽子の無事な姿だった。

「よかった、須見君だったのね」

「怖がらせちゃって、すみませんでした。カガクは…」

「心配ないわ。気を失っているだけよ」

テツが遅れて室内に足を踏み入れる。普段からそうなのか、こざっぱりとして綺麗な部屋のベッドにカガクが横たわっている。陽子は心配ないと言ったが、顔色は青白く傍目からも悪く見える。

「これ、お前がやったんじゃないだろうな」

「ああ…止めをさすのに邪魔だったから突き飛ばしたな」

「お前なあ…」

「須見君、いいのよ。でも、テツ君。これから家族になるんだから、もう少し大切にしてあげて欲しいの」

テツの目線は陽子の真っ直ぐな瞳から外れ、もう一度カガクの寝顔に注がれていた。その顔に後悔も不安も、気遣いも無い。ただそれ以外の表情も見えない。

「今、襲撃をかけてきた男は始末した。もう心配はない」

「そう……」

「でもな、テツ。お前はもうここに居ちゃ駄目だ」

須見を見たテツ。

「言いにくいんだが、お前はここに居ると迷惑がかかるんだ」

須見は真顔でそう言った。テツもその言葉をすぐに理解した。

「俺が狙われることで漣家に迷惑がかかるということだな」

「そうだ」

「そうか。それならば仕方ない」

「私としては、居てくれても全然構わないんだけど…」

「陽子さん。カガクもそうですけど、あなただって心配なんすよ」

「今更心配しても仕方ないでしょう？カガクも無事だったわけだし、テツ君ぐらいのボディガードが居てくれたほうがねえ。今の世の中怖い人も一杯居るわけだから、女二人じゃ何かと不安で、カガク一人で留守番させるのも最近不安で不安で」

「な、長いっす…」

「…ならば俺が居たほうが良いのか？」

「ええ。出来ることなら君に家族になつてほしい」

「えゝ……なんか、でも、いいのかなあ。なあ、テツ」

「……もしものときは、須見がどうにかしてくれないのか」

「俺かよ！？…しょうがないな、責任持てませんよ」

「ええ、ありがとう」

常軌を逸した会話だと考える人も居るのではないか。

彼らの、須見と陽子の考えが明らかになるのはもう少し後の話である。

「ところでお前が戦ったタリウムって奴、他に何か言ってたか？」
「…俺のような人間を増やしたいらしい」

須見はしばらく思案顔で、黙り込んでいた。

「止めを刺したのか？」

「ああ…この、鳩尾を殴った」

テツは自らの胸元に拳を当てた。

「よし、そうじゃもう一度確認に行くから、お前もついて来い。じゃ、陽子さん。片付けてきます」

「お願いね…」

テツは一瞬、陽子の目が陰つたのを見逃さなかった。

部屋を後にする須見に腕を引かれ、テツも後に従わざるを得なかったが、テツは彼女に問いかけてみたかった。

何故そんな目をするのか？

先刻確かに二人はタリウムの死体を確認している。

しかし再び見たその部屋にタリウムのそれは存在していなかった。

「いないぞ」

「？いや、居た。血の跡は残っている」

テツの指差した先には、タリウムのものであろう吐血の跡が残っていた。

「お、本当だ。殺し損ねたんで逃げたのか？そうでなけりや、誰かが死体を持ち去ったのか…」

「この近くには居ないようだが…もう自信は無い」

「随分と弱気だな」

「俺は来たのが須見だと思ったからな」

テツはそういいながら、タリウムの侵入してきた窓の外を眺めた。家に挟まれた暗闇の路地が街灯の明かりに浮かび上がっている。特別彼が感じるものは無く、何の気配も無い。

「とりあえずしょうがないからさ、今からちよつと博士のところまで行ってくれねえか？」

「報告ということか」

「そ。今あったことをそのまま話してくれりゃあいいからさ」

「わかった」

「あ、おい！ちゃんと玄関から…」

テツは窓枠に足をかけると、一飛びで路地に飛び降りた。靴も履いていない。

体感として震度2ぐらいの揺れが須見の居る場所まで響いた。

テツは振り返り見上げ、須見に声をかけた。

「じゃあ、行ってくる」

「おまえなあ」

須見のあきれ声が頭上から飛んできたが、テツは気にする様子もなく暗闇の道を走っていった。

「……やっぱり自我が残ってるのか？聞いてたより人間臭いな」

須見が呟いた。

漣博士の研究所にテツが訪れたとき、迎え入れた30代ほどの取り立てて特徴の無い男が、テツを漣博士の部屋まで導いた。

扉が開いた瞬間、テツは傍若無人にずかずかと部屋内に飛び込んだ。

「漣博士」

「どうした。無駄な用ではないのだろうか」

「無駄かどうか判断するのはあなただ」

「ふん」

須見に言われたまま、テツは起こったことをそのままそっくり話していた。

タリウムが部屋に侵入したところまで話したとき、テツはある種の違った質問を博士にぶつけた。

「博士。金属人間とは俺のようなもののか？」

いいながらテツは博士の黒々とした目を真つ直ぐに見た。

「そうだ。肉体を金属に変化することや体内に蓄積しておいた金属を自らの意思において操ることも出来る」

「何故そんなことが出来る」

「不思議がることは無い。ほんの少し生物として特別なだけだ」

博士はしわだらけの手を握り、目を伏せた。

「金属人間は人間の一種だ。…少なくとも私はそう思う」

「人間というにはあまりに化け物じみていないか？タリウムという男が何も握っていない手のひらから金属片を出したように。俺がそいつを素手で殴り殺したように…」

握って見せたテツの拳は、外見は人のそれとまるで変わらないが、素肌の裏には人間ぐらい破壊しうるものが詰まっている。

「常識外れとは言えるな。ただしそれは世間一般の話だ」

テツが目を丸くしたのを、博士は顔を上げてちらと見た。

「金属人間というのは、闘争の歴史だ。人間に操られてきた金属人間は見世物として、労働用具として。良い様に使われるうち、金属人間は知識を持ち始めた」

「知識？」

「人間が自分たちより劣っているという事実を肯定したことだ。そして子飼いにされていた彼らは人間に反抗した」

ふう、と一息吐いた博士が二の句を継いだ。

「金属人間が長生きするためには自らの存在を自覚し、そのように振舞うことだ。人間と争っても勝ち目は無い」

「何故そんな人間の敵が生まれた？」

「言う気になれん」

「…仕方ないな」

テツの表情は変わらないが、納得していないことはわかる。ただ彼はこれ以上の追及に意味が無いことを悟っていた。

「…そうだ、あなたの孫、カガクが気を失っている」

「何？」

「命に別状は無いようだが。明日病院に連れて行くらしい」

なにやら口中也をもごもごさせた博士が一つうなずいて、それからもう一つうなずいた。

「うむ…そうか。もういい、しばらくは陽子たちと生活してもらおう。いいな」

「わかった…それから」

「どうした」

「須見、彼も金属人間なのか？」

「…そうだ」

カガクのぼんやりした視界がようやくに戻ってきたのは、日が顔を出してから2時間も後の事である。

「はっ」

「気がついた？」

目を開いたカガクの前髪が汗でおでこに張り付いている。

上半身を起こしたカガクのおでこから、水で湿った布巾が落ちた。

「ここは、家？」

「はい、何本に見える？」

カガクは急に眼前に突き出された指にぎよつと気おされたが、

「……さ、3本」

「正解。うん、大丈夫そうね」

傍らに座っていた陽子は笑って、掛け布団の上に落ちた濡れ布巾を手を取った。

それを心あらずに見届けていたカガクの頭がだんだん冷えてくる。

陽子ののほほんとした顔もくつきりと見えてくる。

同時に鮮明に蘇る、昨夜の記憶。

「そうだ、あいつ…あいつは！？私、昨日…？なんか、変な男に」

「落ち着いて、カガク。その人ならテツ君が倒してくれたから」

「テツ……！そうだ、あいつ…」

カガクの脳裏によみがえる映像の、そのテツは氷のような瞳に能面のように感情の無い顔が色の無い熱の無い声でカガク自身に呼びかけている姿だった。

そのことを思うと背中に湿った感覚が際立つ。

今ではカガクの頭にはつきり残っている。

『あなたが俺にとって何か価値があるのなら』

真っ白な顔から放たれたその言葉の熱の籠らなさが。

「あいつ、その…滅茶苦茶怖い。とにかく怖いの」

「何かあったの？」

一連のカガクの説明は寝起きのためか的を射ないことが多かったが、彼女の伝えたい真意は伝わったようだ。

「ね、異常でしょ？お母さん、もう止めようよ。あんなのと一緒に住みたくないよ」

「…カガク、テツ君はあなたを助けてくれたのよ」

「お母さん…！だって、あいつは助ける気なんか無かったから！」

「カガク…」

カガクはこの理不尽な状況に多大な怒りを覚えたが、何故か陽子がテツのことを庇う。そのことでさらに心の混乱と葛藤と、それから憤怒が沸き立ってきた。

「もういい！お母さんが言わないのなら、私が言ってやる！」

叫ぶように言うなり、カガクはベッドから跳ね起きると部屋を飛び出そうとした。

「カガク！駄目よ、まだ安静にしてなきゃ」

言い終わるかのうちに、カガクの荒い足音が階段のほうから聞こえてきた。陽子はすぐさま後を追うわけでもなく、手に握り締めたま

まの濡れ布巾を眺めた。

そして。

それを。

壁に叩き付けた。

第5話 「やり直し」(後書き)

遅くなりましたが、第5話です。
カガク、ついに動くか？

第6話 「V s A u（金） 決意」（前書き）

前話までのあらすじ

少年、テツの訪れによって不協和音の生じ始めた漣家。タリウムを倒したテツは自分の存在の意味に近づく。一方、漣 カガクは襲撃の理由を漣博士の責任だとし、怒りが頂点へと達していた。

第6話 「V s A u（金） 決意」

今日は雲も千切れちぎれな晴れの天気だ。

漣博士の研究所、玄関から庭を突っ切り門まで走る石畳を、竹箒で掃いていたのは、研究者の一人、星野真男^{ほしのまさお}。白衣で身を包んだ彼は際立って特徴の無い顔つきをしている。無精髭が口の周りを黒く見せ、あまり清潔感のある顔ではない。研究者らしいのか、ぼさぼさの黒髪である。

彼は正門が力任せに開かれたような、大きな音を聞いて注意をそちらに引かれた。

その音を立てたのは、彼にも見覚えのある、漣博士の孫娘だった。

「あれ、博士のお孫さん？」

「通してください」

その表情は鬼気迫るものがあり、星野は何を尋ねるでもなく言われるままに彼女に従った。

研究者の星野に案内されて、一室に通されたカガクの目前に、机の脇に立って書類を眺める、白髪の老人。皺だらけの彼の顔を睨み付

けながら、カガクはある種の殺意を持って彼に近づいていった。書類の文面から顔を上げた漣博士は睨むカガクを見返し、深く息を吐いた。

「何の用だ。病院には行ったのか？」

「そんなこと、どうだっていい。今日はあんと話をしに来た」

「…聞こう」

孫と祖父の関係とは思えない、ある種冗談のように凍りついた空気の中、立ち尽くしたままの星野に博士は顎で出て行くように示した。それに従い、星野は部屋を後にした。沈黙の中、部屋の中にはカガクと博士の二人きりになる。

「お母さんと私に二度と関わらないで。あんととは血縁を切つて別人になる」

いきなりの本題、その内容は漣博士の表情を変えるまでは至らなかった。

「もう何だっていい。あんとと家族で居ることがたまらないの」

「……血縁を切る、つまり、全く関係がなくなると判断していいのか」

「……そうよ」

「…陽子から、お前の学費の話は聞いているか？」

「…な、何よそれ」

予期せぬ会話の方向。

「お前はまさか、陽子の収入だけで生活が成り立っていると思っているわけではあるまいな？」

「…何が言いたいの」

「支援しているんだよ。私が。お前たちの生活を」

まさに晴天の霹靂、カガクは完全に虚を突かれ、一瞬は全てを忘れていた。

「仮に今。私がお前たちから手を引いたとして…お前は学校を辞めざるを得なくなる。生活が成り立たないからな…大学などもつての外だ……わかるか？父親の居なくなつた今、お前は私に頼るしかない。お前が決めることで陽子もまた、な」

虚ろだつたカガクの思考が、父親と言う言葉で瞬時に蘇つた。しかしその裏で、カガクは自分の立場を認識し始めていた。

「…だつたら、何よ！またあの化け物が来るつて事なの！？また私もお母さんも危険な目に晒されるつて言うの！？」

カガクは半ばむきになって反論したが、漣博士は真つ白な髭を生やした口元に微かな笑みを浮かべるのみだつた。

「確証は無いがな。さあどうする？…自立の出来ない子供の居る母子の家庭など行き着く先は見えているようなものだがな」

皮肉たつぷりの博士の言葉に、カガクは頭をがんと殴りつけられたような得も知れぬ衝撃を感じた。

まだ子供といつていいカガクにはその言葉はあまりに現実的で、切迫していた。

博士は椅子を回転させて、青ざめた顔で黙り込んでしまったカガクに背を向けた。

「言っておくが、資金だけ頂こうなどという甘い考えは持たぬことだ」

そこまで聞いて、跳ね立つようにカガクは踵を返した。それは胸を張った凱旋ではない。敗北感と焦燥、そして徒労、その全てがカガクの心を締め付けていた。

言い返すことは出来ない。しかも現状はなんら改善されない。自分が無理を通せば母に迷惑がかかる。全ての出口を塞がれた気がして、喉から言葉も出ない。

カガクはそのまま自宅の自室まで足早に帰り、部屋のドアの鍵を中から閉めて、勉強机の椅子に腰掛けた。部屋には陽子の姿は既になかった。

彼女は声を出さずに泣いていた。

（畜生ッ……畜生！）

葛藤が心の中を駆け巡り、カガクの心を内側から痛めつけていく。だが心の中でこの葛藤が一匹の魔物を生み出していたことは、カガク本人ですら知る由も無かった。

それからどれだけの時間が経っただろう。

青く晴れ渡った空も赤色に染まり始めた頃、机に突っ伏し続けている力ガクの、部屋の扉を鈍い音が叩いた。

「入ってもいいだろうか」

扉の向こうから通り抜けてきた低い声。

「入らないで」

「下で陽子が話したいことがあるそうだ」

「行かない」

「どうしたんだ？」

力ガクはどうか、扉の向こうの男がこれ以上関わってこないことを望んだ。

しかし気配は沈黙を守ったまま、いつまでもそこに居る。

「あんたみたいな化け物、私は見たくも無い」

吐き出した言葉は震えていたが、確かに扉の向こうには届いたようだ。

「見なければいいのなら、このままでも構わないだろう？」

揚げ足取りのようなこの言葉に激昂した力ガクは机を叩いて立ち上がると、部屋のドアを乱暴に開け放った。

その一瞬、二人の目が合った。

氷のようなテツの瞳と、炎のような力ガクの瞳が絡む。

「陽子が待っている」

先に口を開いたのはテツのほうだった。それと同時に、カガクの視線が下がる。

極限まで高ぶった憎い気持ちがこの時、カガクの意識をある地点まで導いていた。

それは不完全な復讐点。

それがどろどろと渦巻くようだったカガクの頭を透き通らせたのは、悪魔のささやきとでも言おうか。普段の彼女では決して到達し得ない場所に、引きずり込まれていたのだ。

カガクは口元を吊り上げていた。

それを不審に思ったテツが伏せ目がちの表情を覗き込んだその瞬間。

「協力して欲しい」

痛烈な憎悪の感情がテツを威嚇した。

「何をだ」

「…あいつを、漣博士を、社会的に殺す」

「どういうことだ」

「協力するの！？しないの！？」

カガクの顔は憤怒に染まりきっていた。

「わかった。協力する」

テツは無表情にそう答えた。

逆に呆気にとられたのはカガク、だったがすぐにその表情を隠すと、努めた怒り声で続けた。

「それなら、これを頭に叩き込んで」

カガクの語気はテツが感じた平生の物と一変した、感情を剥き出したものとなっていた。

テツが受け取ったものは、田間ベッドタウン周辺の地図。

漣家から記された手書きであろう赤色の道筋をたどると、大邸宅の並ぶ高級邸宅地にその線は伸び、一軒の家に終着した。

「…金田…」

「その家に、私の目的がある。これを見て」

「これは？」

「あの男に資金援助をしている会社の名前」

その通り、カガクがテツに手渡した名簿のリストには（テツには分からないが）有名な大企業に赤の下線が敷かれていた。

「株式会社“ゴールドリング”。主に鉄鋼、自動車業を生業とする大企業の名前」

「…それとこの金田、何の関係がある？」

「ゴールドリングの社長、シルバー・A・ゴルドの姉がこの家に住んでいる。主に彼女があつた男に金を渡している」

「それで？」

「彼女の家を探して、資金援助の確固たる証拠を掴むの。そうすればどうとでもなる。あの男を…警察に突き出すことだって出来る」

「確固たる証拠とは？」

「だから、そういう書類。きっと彼女の部屋の何処かにある筈」

「よくわかった。俺はそこに忍び込んで、それを見つけてくれば良いんだな」

「…忍び込む方法は私が考える。1日、時間を頂戴」

「ああ」

「それから、このことはお母さんには絶対内緒よ」
「わかった」

流れるような説明にテツは一言も疑問の態度を示さず、鵜呑みして
いた。

「それから、お母さんのこと呼び捨てにしないで。むかつくから」
「陽子…さん」
「うん」

F e m a n 第6話 「v s A u 決意」

漣家の一人娘、カガク。
現在の彼女の家族は母親である漣 陽子、そして彼女の生活する家
から少し離れた場所に研究所を構え、そこで生活する漣^{さざなみまなぶ} 学博士の
二人である。

彼女は10歳になるまでは、父親と母親に囲まれていた。

10歳を迎えた日。彼女の人生の転機となるこの日、ある事件が起った。

殺人事件である。

犯人は彼女の幼馴染。10歳の少年。梅木 轍。

この事件の犯行の現場を一部始終見てしまった彼女の心には深い傷が残され、しかもその同時期に彼女の父親が失踪してしまっていた。

幼少の彼女に残った心の傷の深さはいかほどのものか？

そして彼女は、そのときの苦勞で痩せ細った母の姿を知っている。そんな時。博士は彼女に何もしなかった。研究に没頭していた。

彼女は思った。

あいつは、私達に興味が無い。

翌々日、夜10時を回った頃か。
テツとカガクはコンビニの駐車場にいた。三日月が輝く暗黒の空の

下、肌寒い風が吹きすさぶ。

「いい？あの家には3人、お爺さんの執事と若い女の人のメイドさんと、それからスローネ・ゴルド」

「家族は居ないのか？」

「……まあ、そうみたい。もう大人なんだろうから、親元から離れてるのかも」

二人は行動の目的を整理していた。

コンビ二の傍には川が流れており、その対岸に目的の家はあった。相当大きな家らしく、塀が長く続いておりその敷地は相当な広さだった。

カガクは昨日、実際にこの家に足を運んでいた。偵察役を自ら務めたのだ。

スローネ・ゴルドが在宅していない時間帯を選び、祖父の使いとして差当たりの無い書類を、陽子とカガクの家にある父の書斎から抜き出してきた。これを口実に屋敷の中を案内してもらった。

若い女性メイドは陽気な性格でカガクに色々な情報をべらべらとしゃべったのは好都合だった。

カガクは家の簡単な間取りと、そしてスローネ・ゴルドの書斎を聞いた。

『お嬢様って、秘密主義なの！大切なものは全部あの部屋のどこかにしまっちゃうのよ』

いよいよ侵入、ということになっても、テツの表情は微動だにしない。そのあまりの動きの無さにだんだんカガクは苛立ちを覚えていた。

「もうちょっと、緊張でもしたほうがいいんじゃないの？」

「極度の緊張にはデメリツトしかない」

テツのクールな言い様に面白くなさそうな顔になる。

「それより、スローネ・ゴルドのことをもう少し教えてくれ」

「あの人…スローネには気をつけたほうがいい」

「どういうことだ？」

カガクの脳裏に過ぎる、メイドの言葉。

『でも不用意に書斎に入ったら、私生きてられないもんね。怖い怖い』

人懐っこい笑顔で笑うメイドの姿はけして恐怖など抱いては居なかったが。

「……化け物かもしれない」

「つまり、金属人間だと？」

カガクは一つ頷いた。

「俺はその相手が傍にいれば大体金属人間であるか無いか分かる。

あなたの考えは頭に入れておく」

テツの言葉を聞いて、カガクは眉を顰めた。

「…やっぱり、そんな馬鹿みたいな力もあるのね。仲間意識って事」
「そうかもしれない」

カガクのほんの邪稚にもテツは構いもしない。

「…疑わないの？」

「？何を」

「もしかしたら私が嘘を吐いているかも知れない」

テツは少しだけ目を見開いた。

「そうなのか？」

「い、いや…違う」

見開かれた明緑色の瞳が再び縮まった。

「違うならば気にすることも無い」

「……」

「俺はあなたの力になりたい、それだけなんだ」

「どうして」

搾り出すようなカガクの声に、テツは一つ頷いて、

「あなたが真剣だから」

一つだけ鳴ったインターホンに導かれ、金田家のメイドは早足に歩いていった。

「お嬢様、遅かったですね！って、わっ、わっ、わあっ！」

玄関の大きなドアを力強く開け放ち、彼女が思う主の姿を思い描きながら、メイドが一步目を外に踏み出した瞬間、何かにつまづいて玄関の床に強かに顔を打ちつけた。

「いったあゝ……何よもう……」

鼻頭を抑えながら、彼女が周囲を見渡すが、ドアの周りには人影一つ見当たらない。

「……あれ？誰も居ない……なんだったのかしら……いたずらか……ゆ、幽霊とか」

自分の妄想で背筋が震えてきたメイドの後ろ、屋敷の中、メイドの死角となる、2階へと続く階段の影に爛々と光る明緑色の瞳が二つ。

（召使いがもう一人居るが、これだけ広ければ動きも分かりやすい問題ないな）

廊下に飾ってある1メートルほどの壺台の影に身を潜めたテツはゆつくりと歩いていく白髪の年老いた執事をやり過ごし、周囲を見回

しながら慎重に歩いていった。

廊下には端々に電灯が設けられ、石の床をじんわりと照らし出している。頼りない明かりが微かに廊下を浮かび上がらせていた。

「ここか」

ごく微かな声で呟いたテツはその扉を静かに押した。滞りなく扉は部屋への道を開いた。

四方のいずれの壁も本棚になっていて、その中のいくつかには引き出しがあった。豪華な装飾のなされた本はいずれも厚く、気軽に読むことの出来る類の本は一冊も置かれていない。

テツは部屋を見渡し、中に誰も居ないことを確認するとその部屋に足を踏み入れた。

そしてドアを閉じると、しっかりと鍵をかけた。

これでテツは部屋の中に一人、きよきよと周囲を見回しながら、さながら泥棒のように（ように）いくつかある引き出しを見て回った。そのうちの一つに金色の林檎のシールが貼ってあった。だからテツはそれに興味を引かれ、その引き出しを開いた。

そしてその中身はいきなりテツの捜し求めているものであった。

横書きに連なる文章の一番上に、『漣博士への援助金額』と銘打たれている。その書類には数々の領収書がホッチキスで同じく留められていた。

（これか……これだろうな）

テツがその紙の束を根こそぎ持っていこうとした、その時。

テツは『存在』を感じていた。

思わず振り返った先のドアの鍵が静かに、外側から開いた。

「こんばんは」

その向こうから現れた年若き女性。

腰まで伸びたサラサラの絹の系のような金髪に、麗しく整った顔立ち、そして金色に輝く瞳。

細部まで金の刺繍が入った身体のラインが浮き出るタイトなドレスに、首から提げた真紅のルビー・ペンダントにテツが目を留めた。

「初めまして、F e マン」

ガラス玉のような大きな目を細めて、彼女は軽く手を振った。

「俺を知っているのか」

「同類なのよ？分からないじゃないじゃない」

色っぽい口元に微かな微笑を表して、女は妖艶な腰つきをしていた。

「同類：やはりあなたも金属人間なのか」

「そういうこと」

二人はお互いに、『特有の感覚』を抱いていた。それは細い細い系のようなものを胸に感じているに過ぎないが、二人の間の系はお互いの存在をしっかりと感じていた。

「あなたがスローネ・ゴルド」

「そうよ。初対面はもう少し公的なところでしたかったけど…残念ね」

長く伸びた睫毛の向こう側、細められた瞳が冷たく輝いている。同時に部屋の空気が凍り付いていく。テツが寒気すら覚えるほどに、

スローネの瞳は透き通っていた。

「あなた、名前はあるの？」

「テツ」

「テツ、覚悟は出来ているわね」

瞬間、そのスローネの右腕から金色の布が延びた。

バン、と空気の鳴る音が聞こえた。

思わずテツが飛び退いた場所の轟音とともに地面が深く決れる。

「これは」

「紹介しましょうか」

今度は左腕から同様の布がテツ目掛けて伸びてくる。テツは後ろ斜め上方に跳ね、その2撃目もかわした。

「布の跳ね返りか」

「そうよ。タオルを放って、思い切り引っ張ると音が鳴るあれ。鞭と同じね」

ただその布はタオルの何倍もの長さがある。さらに金色に輝くところも違う。

「金属？」

「紹介するわ、これが私の金…Au」

スローネが微動だにせぬまま両腕の布がふわりと持ち上がり、翼のように広がった。

空気の塵を巻き上げ、それが布の表面をきらきらとチラつかせた。彼女の姿は一瞬の神々しささえ備えていて、

「書類を置いて、おとなしくなさい。そうしなければあなたが死ぬまで続く」

テツは拳を固めると、腰を下げ、どの方向にも動くことが出来る体勢を取った。

（もう時間が無い、が。カガクは問題無い筈だ。後は俺次第…）

金属人間は体の外に出現させた金属を体内に戻すことは出来ない。だがこの時、スローネの体の何倍にも見えるこの両の金の触手の体積はスローネが保有する金のおおよそ3割程度にしかない。

この尋常ならざる体積を可能にする原因は、スローネの操る金属、金の特性である。

金は金属の中で最も展性、延性に優れ、1グラムあれば1平方メートルまでのばすことができ、長さでは3000メートルまで伸ばすことができる。加工しやすい変幻自在の金属！

「…遅いなあ」

コンビニを道路越しに対面に望めるベンチで、カガクはテツの帰りを待っていた。

テツがこの場を離れてから、カガクはここからまったく動いていな

かった。それは何故だか、カガクのテツ一人を窮地に行かせた後ろめたさではないだろうか。

「……」

カガクは折り畳みの携帯電話を開いた。時刻は23:34を示している。

ため息を一つ吐いてから、カガクは携帯電話を閉じた。5月の夜は肌寒く、カガクは身の震えるのを実感していた。

（早く帰ってきなさいよ、全くもう…何やってんだろ…）

堀の向こう、豪邸に目立った変化は無い。無いゆえにカガクは待つことしか出来ない。

彼女は祖父を恨んで、今回の行動に至った。しかし彼女にはテツを見捨てることが出来ない。

テツが彼女のことを純粋に助けているから。そしてそのことに、彼女は心のどこかで感謝してしまっているから。

カガクはそれに気づかない。

布がテツの腕に絡みついた。

途端、スローネは左腕の金布を動かすことをやめた。会話のための

休息だと、テツは理解した。

「あなたはただ人間に利用されているのよ。それが分らないの？」

「わかつている。それを理解して俺はここに居る」

「…何のために、その力ガクって娘に肩入れするの？ 気を引きたいから？ 漣博士に頼まれたから？」

「…俺は力ガクのことはよくわからない。会ってまだ一週間しか経っていない」

テツが力を込めて布を引っ張るも、スローネは微動だにしない。

「だが彼女は現状に苦しんでいる。心の底から何とかしたいと願っている俺は知っている。俺は彼女の為に何かをしたい。それだけだ」

「あなたに何のメリットも無くても？」

「ある。満足がある」

その言葉を聞いて　スローネは表情を和らげた。

「もつと合理的な性格だと思っていたけど」

「勝手な想像だな」

スローネは口元に笑みを浮かべた。

「何がおかしい？」

「残念だと思つて。あなたは履き違えている」

「何？」

「あなたは自分しか見てはいけないの」

その言葉と同時に、スローネの左側の金布が宙に浮いたかと思うと、

4又の触手に分離した。

同時、テツの右手を捕らえていた布が膨大していなす間もなくテツの顔に張り付いた。

テツがそれを引き剥がす前に、分離した4本の触手がテツの両手足に巻きつき、その身体を宙に持ち上げた。

テツの顔に張り付いた布がだんだん太くなり、首のほうへ移動していく。

「本気を出せば、鉄の角材一つねじ切れる。その首だって例外じゃない」

「……」

「許して欲しいなら、そう言いなさい。命だけは助けてあげる」

「言えば開放してくれるのか」

「ふふ…まさか」

冷笑、それがテツの視界に見えたとき、スローネの右手がすっと持ち上がり、空を強く握り締めた。

それが合図であった。

時計の時刻は12時34分、いまだカガクはベンチに座っていた。

「……」

非情に徹することが出来ない、それは不自然なことではない。カガクはまだ高校1年生の少女に過ぎないからだ。しかし、テツを送り

込むと決めたときの彼女は今とはまるで別人であった。
彼女の心を支配した悪魔はどこぞに消え去り、今の彼女はただの女の子なのだから。

（どうして見捨てられないの…私は…どうして…）

意を決してベンチをたっても、数分もしないうちにカガクはベンチに腰掛けるのだ。
そんなことを繰り返しながら、自己嫌悪に苛まれ、彼女は今、テツの帰りを待っていた。

金の布はテツの首を絞め続けるが、

「……これが」

テツを窒息させるどころか逆に首がスローネの触手を押し返していた。

「首が鈍色に…！」

金布の隙間から見えるテツの首が鈍色に輝いていた。

（部分硬化、始めてみる！）

スローネの脳裏に浮かぶその単語。

部分硬化：金属人間が内部の金属を一箇所に集中させることで、通常の純粋金属の3倍以上の硬度を持たせることが出来る技術。

「今度はこっちの番だ」

テツの凍りついた言葉がスローネの耳に届いた瞬間、テツの自由を奪っていた布が縦横に引き裂かれた。

自由を得たテツの身体が重力に従い、落ちる。

絶対的優位に立っていると確信していたスローネは自らの読み誤りに速やかな思考が出来なくなっていた。その僅かな隙を目指して、地面に降り立ったテツがその地面を後ろに力の限り蹴押した。

一跳ね、テツは迎え撃つ金の布の束を撥ね退け、さらにもう一步、床を蹴った。

その一步で漸くにテツの拳がスローネまで届く距離まで辿り着いた。その足元を襲う金色の布をテツは踏んづけ、思わぬ反動でバランスを崩したスローネの視界に、腰に溜めた拳をはなたんとする殺氣が見えた。

全力の拳は鈍色に光り輝き、腰元から異常な速度を持って放たれた。金の布がその拳から守ろうと瞬時に巻きついたが、意に介さぬまま鉄拳は、

（殺される…！）

スローネの頬を掠めた。
掠めたのだ。

（外した…！？）

一番驚いたのはスローネ、全身から冷や汗が噴き出していた。

（いや、外れたの?!）

頬から垂れたものは冷や汗と、一筋の流血。

そしてスローネが振り向いた先に、胸元を押さえて倒れ付すテツの姿。

「!……」

「……もう変化できなくなっているようね」

スローネが頬を拭くと、上質な服の袖に鮮血の跡が滲む。

「が、は」

（金属欠乏に陥っている…）

金属人間は食事によって取り込んだ金属を内部のリングに貯蓄することが出来る！

条件1：貯蓄する分は各々の金属の純粋なものに限る（酸化物などはそれに含まれない）！

条件2：100%金属を貯蓄することは不可能！その日の体調如何によつて100%に限りなくすることは出来る！

条件3：日々の新陳代謝で内臓の金属は減り続ける！これが1割を切ると、心身の状態に異常が生じ始める！

条件4：内臓金属が無くなれば金属人間は死ぬ！（無論その前に死ぬこともある）

（通常の三倍以上の硬度を誇る部分硬化は皮膚周辺に存在する鉄分を凝縮して達成される！おそらく彼は内臓の金属が不十分（およそ70%）、部分硬化は内臓のエネルギーを異常に消費する。これは彼がまだこの部分硬化になれていない証拠！）

スローネの推測は大体のところであつていた。

（おそらく慣れない部分硬化の多用、だから空っぽになっている）

スローネは北側の部屋の扉に向かい、戦いを覗いていたメイドの一人にある指示を出したようだ。

「お嬢様、ご無事で…！そ、それ、お怪我をなさっていませんか！？」

「心配ないわよ。大丈夫。それより、すぐに今から言うものを持ってきて」

滲んでいた視界が鮮明になる。

ふと気づくと、口の中になにやら硬い異物が入り込んでいるのが分かる。無意識のうちに、テツはそれを噛み砕いて飲み込んでいたようだ。

「鉄くず…？」

「そうよ。気分はどう？」

「…駄目だ」

テツは指さえ動かせない身体を恨んだまま、目だけを動かして頭上のスローネを見上げた。穏やかな表情の彼女の後ろから、不審そうに眺めるメイドの姿も見える。

「…俺を助けたのか…」

「そういえば理由を聞いてなかったと思って。話してくれるかしら」
「……」

「口止めされてるの？ 案外用心深いのね」

スローネは僅かに微笑んだ。

「じゃあそれを当てて見せましょうか」

「……」

「漣博士の下から逃げ出したくなった、もしくは状況を変えたかったあなたのお友達の力ガクちゃんが、私の家にあなたを送り込んで書類の一つも持ってこさせようかって考えたのね？」

「…当たり前だ」

「もしくは。…この事件をだしに、あなたを警察に突き出させるつもりだったとか」

「……それは聞いていない」

「安心して。私達は同属を無碍に売り飛ばしたりしないわ」

戦闘中の表情とは、お互いに全く違っていた。

「人を信じる時は考えることをお勧めする。このままじゃ長生きできないわよ」

「……肝に銘じる」

「よろしい。さあ、食べて」

若干わくわくしたメイドの差し出した鉄くずをテツが咥えようとし

たとき、そのメイドの腕にスローネの金布が巻きついた。

「わっ、な、何ですかお嬢様！手を使ってください、びっくりするから！」

「その前にもう一つ。漣 カガクは自宅かしら？」

「12時を過ぎていれば、その予定だ」

時計の針が深夜12時40分を過ぎた頃。
腰に不意の振動を感じ、

「やっと…来た」

その相手がテツだと確信して何故かほつとしたカガクはポケットの振動を続ける携帯電話を取り出し、開いて耳に当て通話ボタンを押した。

「遅い！今何処！？」

『屋敷の中だ』

電話の相手は予想通りだったが、反応が予想外だったカガクは勢いを失った。

「な…なにしてるの！？」

『スローネ・ゴールドに負けて、言うことを聞かされている』
「……………」

絶句したカガクはしばらくの間、言葉を発することが出来ないで居た。

『お電話代わらせて頂きました。漣 カガクさんね』

急に变化した、電話主はしつとりとした女性の声だった。その声の持ち主が誰なのか、カガクには分かっていった。

「……………はい」

『今何処に居るの?』

「……………そこから、近くのコンビニの前…のベンチ…」

『いい返事よ。真実じゃない場合は、テツ君の命は無いものと考えて。分かってている?』

「……………はい」

カガクは身体の全ての力が抜けて、ベンチの上で頭を垂れた。彼女は彼女の計画全てが破綻したことを知ったのだ。

「彼女はあなたを見捨てなかった。前言撤回、させて頂くわ」

「ほうは（そうか）」

「わぁ、ほんとに食べてる…」

物珍しそうな様子でテツが鉄片を頬張るさまを、メイドが眺めていた。

「カガク」

「……」

テツを先頭に、その斜め後ろにうつむいたカガク、さらにその後ろにスローネが漣博士の部屋に入ってきた。

部屋の中にはスローネからの連絡を受けた陽子、漣博士、須見、それに星野が迎え入れる。

周囲からの視線で身が縮む思いのカガクと対照的に、テツは真っ直ぐと立ち周囲を見回している。

「よお、お前ら！捕まっちゃったな、あっはっはっは」

「そうだな」

明るい須見の声と応じるテツの声が場違いに聞こえるほど、張り詰めた空気の中、テツの陰に隠れたカガクに向けて、漣博士の低い声が飛ぶ。

「随分とたいそうな家出だったな」

「……」

カガクは下唇を噛み、ずっと下を向いたままだ。

「お父さん、カガクはとても疲れています。どうか、今日のところは…」

そんな彼女を庇うように陽子が博士に許しを乞う。博士は深々とため息を吐いた。

「…まあいい。陽子、二人で先に帰るんだ。私はこいつに話がある」
「わかりました。…さ、カガク」

カガクの肩を抱くように陽子はカガクを部屋の外まで運んでいった。

「お前がけしかけたのか？」

一段と低く張り詰めた博士の声に首を振ったテツは、答えた。

「違う。彼女の意味を俺が手伝っただけだ」

「…そうか」

「博士。あなたがカガクを追い詰めた」

「そうだな。否定はせん」

「否定はどうでもいい。状況の改善が必要ではないのか」

「考えておこう」

どうにも掴みきれない博士の態度に、テツが更なる追求をしようとしたとき、その肩を須見がぽんと叩いた。

「まあまあ、そんなに熱くなるなよ。お前、にしてもなんだこのアザ。どこのゴリラ女に襲われたんだ？」

須見が指差したテツの首筋には、赤黒いアザが痛々しく残っていた。

「…須見、後ろの」
「なぬ？」

一瞬早く屈んだ須見の頭上を金色の棍棒が通り過ぎていった。
すんでのところでテツも身を引いてかわす。

「あ、あぶね！」
「惜しい」
「げえっ、スローネかよ」

嫌悪をむき出しにした表情で、スローネが須見の顔先に作り上げた
金の刃を突きつけた。

「気安く呼ばないで。虫唾が走るわ」
「なんだ、お前、こんな化け物にやられたのか？そりゃあ無理ない
な、あつはっは…うおっ！？」
「そこに直りなさい！一撃で仕留めてあげる」
「やめんか馬鹿共！！ここには大事な資料もあるんだぞ！」

博士の一喝で、スローネは金の刃を布状にして自らの腕に巻きつけ
た。

須見はいまだ身構えたまま、そっぽを向いたスローネを睨んでいる。

「ちっ」
「このアマ…」
「…で。そろそろあなた達がどういう団体なのか、教えて欲しいん
だが」

テツの無表情も呆れ顔に見える。

「金属人間を増やそうという連中を、『レアメタル』という。奴等は最終的に全ての人間を金属人間へと進化させる…そんなつもりでいるようだ」

「金属人間、か。俺のような？」

「そうだ。金属を内蔵し、意のままにそれを操る…さらに、自分の主金属ならば摂取しても無害という特性を持つことが出来る」

「主金属？」

「お前ならば鉄。そこにいる須見ならば炭素。スローネならば金。それぞれに与えられた、『リング』の材質による特別な金属のことだ」

「おうよ」

合いの手を入れる須見を毒々しい目つきでスローネが睨み付けた。

「俺のところに来たタリウムも…」

「おそらくはタリウムが主金属だろう。運が良かった。奴は人を殺すことなど意に介さない」

「ふむ…つまり、あなた達は奴らの意思を否定する団体だということか」

「そういうことだ。つまり私達は金属人間を絶滅させるために存在している」

「だが、俺達は金属人間だ」

「矛盾と思うか？」

漣博士は右拳を握った。

「力には力を。奴らは強大で根深い。根絶やしにする方法を知るには、やはり研究は必要なのだ。そして我々はお前の力も欲している」
「……」

「今すぐというわけにはいかんだろう。明日、もう一度話がしたい」

二人の話の間に、スローネは一人部屋を立ち去っていた。

深夜を回りもう月も沈んでしまった。

「くっそ、いいか。スローネは簡単に信用すんなよ。あいつの狙いは底が知れねえ」

「資金援助をしているようだな。何故だ？」

「ああ。なんでも、人探しだと。それが一番の近道なんだとさ」

須見は心底どうでもいいといったような顔でそのことを話した。

「にしても、今はお前のことだろ？」

「……金属人間として戦うか」

「あんまり急だからな。ま、俺はお前は誘いに乗ると思ってるけどな」

「何故だ？」

「考えてみるよ。お前にはメリットだらけじゃないか。例えば……なんだ、まだ言えねえけど、色々あるんだぞ」

「……」

「ちよつとハードだけだな。ま、気楽に考えようぜ」

「そのほうがいいだろうか」

「あつたりまえだろ」

気楽な声をあげる須見の言葉通り、テツは何事も気楽に考えたほうがいいかと思い始めていた。

カガクの家の前に辿り着くまでは。

この家の二人はまだ起きていた。
電灯の明かりがカガクの顔に暗い影を落とす。

「落ち着いた？カガク」

彼女の傍らには、洗濯物を畳む陽子の姿。二人は同じソファに腰掛けていた。

「……お母さん、ごめん」

その謝罪の言葉は微動だにしないカガクの口から漏れ出していた。
陽子は穏やかな笑顔を消して、口をへの字に曲げた。

「まったく、そんな顔するぐらいなら。どうしてこんなことしたの？…まさかとは思うけど」

言い終わる前に、カガクは頭を振った。

「私があいつをけしかけたの。私が全部悪いから」

袖を握り、カガクはテツを庇うような言葉を口にした。
陽子は素直に驚き、そして本人もいまだにその言葉が信じられないようだ。

「わかってるよ。テツ君のことじゃない」

「え……？」

「……ううん。きっとカガクは、私のために頑張ってくれたんでしよう？」

顔を上げたカガクの目には、いつしか大粒の涙が溜まっていた。

「ありがとう、カガク。私のことを心配してくれたのね」

「……何も知らなかったし、何も出来なかった……ただ、あいつに頼って……利用して」

悔やむ思いがカガクの拳を握らせる。

「私は……っ！……！」

「カガク……」

溢れた思いがカガクの頬を涙となって濡らしていく。その涙を誰にも見せまいとするように、陽子は娘を胸の中に抱きしめた。

「カガク、ごめんね……ごめんね……」

「うう、うっ……う、うっう、うっうっうっあああああ」

須見はドアに手をかけたまま、動けなかった。テツにはその理由が知れていた。

「ちょっと時間潰すか。近くにコンビニあるんだ」

須見は笑って、テツはうなずいた。

「コンビニというと、あの明るい建物のことだな」
「そうだ。ほれ、行くぞ」

須見の後ろに従い、テツは歩いた。

テツは一度だけ、振り向いた。

「おい、何やってんだ？」
「すぐ行く」

（俺は金属人間。疑問は数え切れないほどある）

（とりあえず、カガクと陽子さんは俺が守る）

（二人で孤独なんだ。だから、俺が守る）

F e マン、テツはそんな決意をした。

第6話 「V s A u（金） 決意」（後書き）

遅くなりました。ようやくF e マンの第1部が終わったようです。
長かった…。

感想いただけたら嬉しいです。

第7話 「決意表明」(前書き)

金の金属人間スローネとの戦いで、テツは漣博士の目的を知る。それは金属人間の絶滅だった。テツは漣博士と話をするため研究所を目指す。

第7話 「決意表明」

今日訪れる予定のFeman、テツの訪れを待つ漣博士の研究室内には4人の金属人間。それに漣博士を加えた5人が居た。

「ま、いわばオリエンテーションだよな。これ」
「そうだな」

そのうち2人の金属人間、短髪の、ルーズなズボンと半袖のTシャツの青年須見 直人と、ボサボサ頭で白衣の星野 真男の二人が木組みの椅子に腰掛けていた。

「そっぴや星野さん、そのほっぺどうしたんだよ」
「これか？ いや、話したくないけど…嫁にやられたんだ」

情けない顔で説明する星野を須見は笑い飛ばす。

「はは、相変わらず仲良いな」
「お前、今の話の中にそんな要素は一つも無いぞ」
「わかんだよ、俺ぐらいになると。あっはっは」
「そっかい、そりゃあいいや」

書類をまとめる紙の音でその会話は断ち切られた。

「博士、今月の自己人体実験結果です」
「ご苦労」
「なんだ、上乃木。まあだそれやってんのかよ」
「須見、これは職務上の義務だ」

「何がわかるつてもんでもなし、そんなこと無理にしなくてもいいんじゃないの？」

へらへらと笑う須見の顔を睨みながら、礼儀正しい印象を与える上
下灰色のスーツを着ている上乃木と呼ばれた須見と同年ほどの男
性は博士の机の傍に本棚を背にして立った。

「須見、確かにお前の態度は悪すぎる。きちんとやるべきことはや
れ」

「へえーへえー、わかったよ博士。気が向いたら持ってくる」

須見のこの礼節をわきまえない態度に上乃木はいつも不満を持って
いるようだ。

「ゴルド、あなたもだ」

上乃木がドアの近く、壁を背に向けて腕を組みひたすらに目を瞑る
金髪の容姿端麗な女性に声を飛ばしてきた。淡い黄色のタイトなド
レスに身を包んだ彼女はうつすらと目を開けると、髪の毛より濃い
金色の瞳で上乃木の顔を見つめていた。

「提出回数は須見と同レベルだ。非常に悪い」

「…私にその義務は無い。何度も言わせないで」

「それでも博士の研究に貢献しようとは思わないのか？」

「私はこの組織に、あなた達の情報を搾取するつもりで身を置いて
いるに過ぎない。意味も無く餌を強くする馬鹿はこの世に存在しな
い。いつあなた達と反目することになるか、分かった話じゃない」

「何だと」

「おい、スローネ」

諫める須見の声も無視し、不穏な空気が部屋の中を席卷している。

「カガク、こつちだ」

「待ってよ、速い」

そこになんとも緊張感の無い喋り方の二人組が、博士の部屋の前にやってきたようだ。

「ここなの？」

「ああ、間違いない」

「……そもそもなんでこんな地下にあるのよ。結構お金かかってるのかな」

「確かに、意欲的に漣家にあまり還元しているようには見えないな」

「でしょ！？…って、あんたにあれこれ言われたくない」

「そうか。難しいな」

「入って来い」

すぐに扉を押し開いて現れたテツはチェックの薄手のパーカーに深い青色のジーンズを履いていた。

その後ろ、股下までの淡い青色のワンピースに黒色のタイトな膝上までのズボンを履いたカガクが恐る恐る部屋の中へ足を踏み入れる。そのいきなりに、漣博士が威厳ある声で説明を開始した。

「私は最低限必要な生活費を渡している。これは私と陽子の間で行われた話し合いによって決められたものだ。疑いがあるなら後で陽子に確認してみるといい」

「う……」

顔を赤くするカガクを横目で眺めた後、テツは博士の机の前まで足を進めた。

「なぜお前が着いて来た？」

出鼻をくじかれたようだが、博士の言葉に一步も引くまいとするようにテツの横に立ち、両拳を握ったカガクはきっぱりとした声で言った。

「私が頼んだ」

「何故」

「これ以上、あんた達に何も知らされないまま危険な目に会うのは絶対に嫌だから」

その話を聞いていたらしいスローネが珍しく口を挟んだ。

「へえ、もつと落ち込んでるかと思ったけど」

「……」

「おい、あんまりいじめてやんなよ」

「直人……さん」

「よつ、久々。昨日気づいて欲しかったけどさ」

片手を振った意地悪な笑顔の須見に、つられてカガクも笑ってしまふ。

それに力を貰ったのかどうかは知らないが、カガクは再び博士に告げた。

「もう蚊帳の外なんかごめんよ」

「……わかった。テツ、これを」

博士は机の上に置いてあった厚い書類をテツに手渡した。書類には細かな文字がたくさん記されていて、テツにはおるかカガ

クにも上手く理解できないものばかりであった。

「えーっと……」

「……」

「二人とも、小難しく考えなくていいよ。とりあえず一通り目を通してみて」

星野が出した助け舟に、眉根を寄せていた二人は素直に従ったようだ。

「大まかに重要な案件は3つ。

一つ、如何なる時の召集命令にも応じること。

二つ、本人を含めた従業員の作戦内での怪我、また死亡についての抗議は認めない。

三つ、従業員が求める衣食住の経費は提出される請求書を通して連博士側が全額負担する。

以上だ」

博士がまとめた答えを受けて、カガクは横の星野に疑問をぶつけてきた。

「三つ目は本当に、全部負担……?」

「上限はある。一人につき3億円だ」

「さんおく!?!」

あまりの数字にぼかんとしてしまうカガクの隣、何も分かっていないのが一人。

「それは凄い額なのか?」

「凄いに決まってるじゃない! 3億って言えば……えっと、どのくら

いかな」

「高校生である力ガクにも馴染みの無い数字に、彼女の頭も迅速な理解に至らない。」

「それほど多くないと思うけど?」

「お嬢様はこれだからなあ」

「自分の命を懸けるのよ?もっと高くたっていいぐらい」

スローネはそんな考えを持っているらしい。

スローネの言葉に釈然としないのか、二人の会話に力ガクが口を挟む。

「命を…賭ける?そんなに危ないことをするんですか?」

「……私たちを見ていて、何も感じないなら大物ね」

「契約書にもあるだろ?死んでも文句言えないきつい仕事なんだ。金属人間絶滅ってのはな」

「金属人間絶滅…」

「なー、と須見は向こうのスローネに同意を求めるが、彼女はただテツの方をじつと見ている。」

「あなたはわかってるんでしょう?」

「あなたには殺されかけた」

「あなたが無断で人の家に入らなければ。そんなことはしなかった」
「わかってる。その責任は俺と力ガクにある。俺はタリウムを殺し、あなたに殺されかけた。理解はしている」

「…あのなー、どうでもいいだろそんなこと。とりあえずその契約書の中身は理解してくれたか?」

「仮に俺が死んだ場合、その3億円はどうなる?」

尋ねたテツの質問に答えたのは、カガクのどこか呆然とした顔だった。

「あんた、何：言つて」

「その場合、事前にお前が決めた人間一人に生前用いた金額を差し引いた全額支給することが可能だ。それでいいなら一番最初のペー
ジに苗字と名前を記せ」

「安心した。ペンをくれ」

博士は引き出しからボールペンを取り出すと、テツに放り投げた。
それを苦も無く捕まえると、テツはボールペンをしっかりと握りな
おした。

「応じるな？」

「ああ。承諾した」

すると、突然テツの指が止まる。

「……」

「お、どうした」

須見の問いかけにも微動だにしないテツの顔をカガクが覗きこむ。

「…博士」

「どうした」

「俺には苗字が無い。どうしよう」

須見がああ、と相槌を打てばスローネは開けていた薄目を閉じ、カ
ガクは何やら慚然とした顔つきになった。

博士はふと考え、

「そうだな。しばらくは漣、でいい」

そんな答えをテツに渡した。

「ちょっと、何でそんな！」

「お前は口を出すな」

口を挟もうとしたカガクを一言で押さえつけ、博士はテツが書類へのサインを終えるのを確認した。

テツが差し出した書類には、ひらがなでさざなみ てつと記されていた。

「…後々、色々な話がお前の下に舞い込むことになるはずだ。陽子やその須見にでも相談して、必要なものと不必要なものの判断をしっかりとしろ。いいな」

テツは大きく頷いた。

「よくわかった」

「今日はもういい。カガクを連れて家に戻れ」

すぐさま踵を返したテツに慌てて追いつがったカガクは須見たちに軽く会釈をした後、部屋を出て行った。

「…須見。そろそろアルミが到着する頃だ」

「わぁーったよ。にしても、いいのか？テツを頼んで」

「大丈夫だ。最悪の結果になるならテツを捨て駒にしたほうがいい。行き詰っていたところだ」

「けっ」

須見も部屋を出ようと、椅子から立ち上がった。

「須見、博士にその態度は何だ！」

やはり須見の態度が気に食わない上乃木が須見の肩を捕まえようとしたが。

「お前が口出すことじゃねえよ、上乃木」

きゅんと引き絞られた瞳から全てを喰らい尽くすほどの殺気が上乃木の足を下からせた。

「あいつは俺が死なせねえ」

憎悪の表情のまま、須見は博士に背を向けた。

部屋を出た須見の後を追うように、スローネも部屋を出た。

長い廊下の途中、先に行く須見の背中に追隨するスローネが声を飛ばす。

「随分彼の肩を持つのね」

須見は足を止め、振り返った。溢れ出る殺気の矛先はスローネとて例外ではない。

「悪いかよ」

「……」

スローネは押し黙ったまま視線を下げた。いつもの冷徹な無表情ではなく、喉元に何かを詰め込んだような苦しそうな顔だった。

「…黙るなよ」

須見は険しい表情を溶かし、スローネの前まで近づくと、いきなり彼女の頭を軽くポンポンと撫でた。

「心配してくれてんのか？ありがとな」

明るい苦笑いを浮かべた須見の手を、スローネの手から伸びた金色の布が弾く。

「誤解しないで。馴れ馴れしい」

須見は剣のように尖る彼女の態度の中に、言いよつの無い温かなものを感じていた。

すぐさま踵を返した彼女の背中を視線だけが追って、須見はくすくすと笑った。

「可愛いなー、あれは」

その笑いも一度だけ振り返ったスローネの絶対零度の瞳に停止させられた。

時刻はすでに午後2時を回っていた頃になる。テツとカガクは帰路に着いていた。

思ったような会話の出来なかったカガクは悔しそうに歩き、テツは平然としていた。

「何よあいつ、偉そうに…聞きたいことも全然聞けてないし」

「しかし何も言い返さなかったな」

「……うるさい……でも、あんたさ、いいの？あんな危ないところに」

カガクの言葉に一つうなずいたテツは、

「どの道、戦うことになるなら情報が気軽に手に入るほうがいい」

きっぱりと言った。

「え？」

「俺はあなたと陽子を守るために戦いたい」

「……はあ？」

真っ直ぐきっぱり言い切るテツの言葉が、カガクにはよく理解できないようだ。

「あなた達には味方が居ないと思うんだ」

怪訝な顔つきが一変、表情が不満に溢れたものになる。テツは無表

情のままそれを眺めていた。

「…大きなお世話。それに、あんたみたいな奴に守ってもらわなくても直人さんがいるなら大丈夫だから」

「須見？」

テツには須見とカガクの接点がよく分らない。お互いに知ってはいるようだが。

さらにテツは心の中で思う。彼女の母親、陽子もまた須見のことを知っていた。現時点で金銭的な繋がり以外に漣家と博士との接点がほとんど無いことを考えると、過去に博士が陽子たちと一緒に暮らしていた、または須見自身が陽子たちと暮らしていたことになる。

（カガク達と須見を繋ぐのは当然組織絡みであるはずだ。そうでなければ陽子さんが金属人間のことを詳しいわけが無い）

そんな推理をしていたテツは、しばらくカガクの声が頭に入ってこなかったようだ。

「…ねえ、聞いている？」

「すまない。聞いていない」

「この……直人さんのほうがずっと頼りになるし、安心できるって言ってるのよ」

「そうか」

「まあ、あんたみたいに得体の知れない奴よりずっとましよね」
「……」

カガクは皮肉めいた言葉を吐いたが、前の視線の先の一点を凝視するテツから返答は無い。

「な、なによ。黙り込んで…言いたいことあるなら言えればいいじゃない」

自ら突き出した槍を引けないカガクが慌てたようにテツに不平を飛ばしてきたとき。

「あそこ、金属人間が居る」

「えっ」

テツの指が向く先、漣家の前に立って携帯電話を操るのは、くすんだ赤色のさらさらの腰ほどまである長髪を後頭部で2つに分けて三つ編みにしている、カガクと同じ年ぐらいの可憐な少女だった。華奢な体つきで、半ズボンから覗く足は健康的である。パツチリとした大きな目の中に銀白色の瞳が動き、二人の姿を捉えたかと思うと、表情には満面の笑顔が浮き出た。

「おかえり！待ってたんだ」

俊敏に、10メートルほどの距離をたった一步でテツの眼前に近づく、

「あー！あなたがF e マン？わー綺麗！」

きやあきやあと黄色い声でテツの周りをびよんぴよん飛び跳ねるこの少女は、テツの腕に絡み付いた。

「誰だ？」

「私？あなたと同じ、金属人間！アルミ・リリー、よろしくね！」

「俺は漣 テツ。よろしく」

テツの言葉に表情が洩るカガクだが、テツは気がつかない。

「…テツ、騒ぐならどこか別のところで騒いで。邪魔」

「俺は騒いでいない」

「で、誰？この陰険そうな子」

「なっ」

「漣 カガク。漣博士の孫だ」

「ああ、あのおじいちゃんなんか大っ嫌い〜っていうあれ？」

嘲る様な少女の言い様に、カガクの眼が鋭く、敵意をむき出しにする。

その無言の圧力に少女は慌ててテツの背後に隠れてしまった。

「こ、怖い」

「いい？さっさと何処かに行って」

「わかった」

リリーの腕を引っ張って、テツは近所の公園を目指すつもりで外へ出た。

彼の後ろで呟くようなリリーの声が聞こえる。

「…いい気なもんよね。何も知らないって」

「？」

訝しがるテツの腕に絡み付いて、リリーはさらに尋ねた。

「ね、ね。漣で苗字が同じってことは、養子なの？それともあの子と結婚？」

「漣博士がこれでいいといった」

「へえー、あ、そうそう。君の初仕事、私が担当になったから。よ

ろしくね？」

「初仕事？」

「そう。でもとっても簡単な仕事だからすぐ終わるよ。明日、朝8時！起きて準備しててね？」

指先を胸元に押し当てられ、多少の息苦しさを覚えたテツは心に不満を覚えた。

「そこまで身体を密着する必要があるのか？」

「え？…ふーん、鈍いんだ」

「？」

「よお、会えたみたいだな」

「須見」

そのとき、ふらりと現れた須見がテツ達二人に手を振った。

「あー、須見！」

右腕でテツの左腕を捕まえたまま、左手の指がびしりと須見の顔を指した。

須見は大きなため息を吐くと、実に面倒くさそうな表情を顔ににじませた。

「…相変わらずうるせえなあ、リリー」

「須見、知っているか？これを」

腕にすがりつくリリーを指差すテツ。

「これって…ひ、酷い」

「ああ、これはな」

「これって言うなあ！」

「アルミ・リリー。アルミニウムの金属人間だ」

むきになって膨れ上がった顔が一転、にっこりと笑ってみせた。

「よろしくね、テツ！」

「アルミニウム……」

「金属の一種。一円玉の材料だ」

テツは須見の顔を見た。

「仲間か？」

「そういうこつた。ま、見ての通り人材不足でね」

「これでも須見よりか金属人間歴は長いんだから」

鼻高々に威張ってみせるリリーの顔に若干の違和感を覚え、テツは再び須見の顔を見た。

須見は肩をすくめて、うなずいた。

「そういうこつたよ、先輩なんだこれで」

「これでか」

「だからこれって言うなあ！」

外で聞こえていた騒ぎ声も遠くに行ってしまった。

リビングに入ってきた陽子はソファにだらしなく寝転んで雑誌を

広げる娘の姿に嘆息して、

「カガク、帰ってきたならただいまぐらい言いなさい。びっくりしたじゃない」

「はい、ただいま」

「まあ、態度悪い」

カガクの頭に雑誌の内容はまるで頭に入ってこなかった。

『金属人間の絶滅』

漣博士が目指すものはそれなのだろう。しかしそれを研究しているのもまた博士自身だ。

（どういふつもりなの！？あいつがテツみたいな金属人間を作ったんじゃない？テツが言ってた、レアメタルのこと？）

考えるだけでも頭がこんがりそうになるこの問題よりさらにカガクの頭を圧迫するものは。

『仮に俺が死んだ場合』

頭に反芻するその言葉。カガクは雑誌を机の上に放り投げると、両手を頭の後ろに持っていていき仰向けに天井を眺めた。

（…バカじゃないの。何死んだ後のことなんか考えてんのよ）

カガクは知らない。

テツがこれからさらに深みへと踏み込もうとするその世界は、命の価値などたいしたことは無いということ。

F e マン 第7話 「決意表明」

第7話 「決意表明」(後書き)

あまり進展しませんが、F e マン7話目です。

リリーはキーマンになるはずになるはず。須見も過去に何やらあったらしい。この辺も早く説明したいです。

そろそろ辿子のことも書きたいなあ、と思うところでまた次回。テツとリリーの凸凹コンビにご期待ください。

よろしかったら感想をお願いいたします。

第8話 「V S W（タンゲステン） 人間」（前書き）

金属人間団体『レアメタル』との戦いを決意したテツは漣博士と雇用契約を結ぶ。あっさりと自分の向かう先を決めてしまった彼の態度に疑問を覚えたカガク。彼らの前に現れたリリーという名の少女と初任務を行うことになったテツ…。

第8話 「V S W（タンゲステン） 人間」

高校一年生、漣 カガクの朝は8時丁度に始まった。彼女の家から学校まで徒歩15分ほどかかり、さらに始業のチャイムが鳴るのは9時丁度。それを逆算して彼女に与えられた時間の猶予は45分ほどということになる。彼女は手早く着替えを済ませ、身だしなみを整えた後、母に用意された朝食をもぐもぐ食べきったのが8時35分ごろ。それから雑用を済ませた後、8時40分には彼女は玄関で靴を履いていた。

「忘れ物、無い？」

「うん、大丈夫。行ってきます」

「気をつけてね」

母に見送られ、玄関の扉を押したカガクは眩い朝の光に包まれる外へ一步を踏み出していく。

「や、おはよ！」

「…お、おはよう」

玄関を飛び出したカガクを出迎えた、快活な笑顔の主は顔の横で軽く手を振った。

「カガク、今から学校？」

「うん…何か用なの？」

カガクは驚いた表情を沈めた途端、その言葉を鋭いものとして飛ばしていた。

突然の来訪者リリーは苦笑を浮かべ、

「テツに会いたいんだけど」

と続けた。カガクはそれを聞いてますます不機嫌な顔つきになったが、踵を返して、玄関の中に戻った。

落ち着かない心をそのままに、カガクは乱雑に靴を脱ぎ捨てると2階へと駆け上った。

「忘れ物ー？」

呼びかける母の声を無視し、彼女はその中の一室の前まで足を運んだ。

「ねえ、昨日の娘、来てるけど」

カガクは中に居るであろう、居候の少年テツを呼んだ。
しばらくしてガラガラと引き戸が開かれた瞬間、カガクは息が止まる思いであつた。

「どうした」

「なっ、なんで裸なの!？」

上半身裸で、下にひざ下までのダボダボしたズボンを履いたテツが現れたからだ。

「ああ、今着替えていたところなんだ」

カガクはにべもなくテツを室内に押し返すと、思い切り引き戸を閉めた。

「だったら着替えてから出てきなさいよ、バカ！」

「苛立っているから急いでいるのかと思った。すまなかった」

再び引き戸がガラガラと開くと、中からよれよれのＴシャツ一枚を着たテツが現れた。

眼を擦りながら、のそのそとカガクの横を通り過ぎた。

「リリーが来ているんだな？」

「そーよ。早く降りてきなさいよ、全く。私だって急いでんだから」
「すまない」

カガクは階段を下りながら、先に行く足音に心をかき乱されるようだった。

まったく、と心の中でため息を吐いて、カガクはとにかく学校へ向かうつもりだった。この朝の煩わしさを一刻も早く忘れてしまいたいと思ったからだ。

外に出たテツとカガクを、リリーが笑顔で出迎えた。

「二人の声、聞こえてたよ。仲良いんだ」

「そんなわけ」

「そんなことは無い。事実、彼女は俺を嫌っている」

抑揚の無い一本調子の声がカガクの耳を通り過ぎた瞬間、不機嫌な顔が一気に浮き出たカガクは僅かに舌打ちをして、乱暴にテツとリ

リーの間を通り過ぎた。

ぐんぐん遠くなっていくその背中を見送って、テツは首を傾げた。

「何を怒っているんだ」

「……さ、準備は出来てる？」

「ああ。特に持ち物も無いんだろう？」

「そうだけだね。調査場所まで須見に車で送ってもらうことになるの」

「わかった」

「…にしても、テツ？さっきの態度は無いと思っな」

「さっきの…カガクのことか」

「そう。どんな女の子だって傷ついちゃうよ」

テツは無表情に明後日の方向を見た。

「どうでもいいって顔ね」

苦笑したリリーに、テツは頷いた。

F e マン 第8話 「V s W 人間」

タンゲステン

古いタイプの白色のワゴン車はところどころが軽く汚れており、相

当年季の入った車だと思い知らせてくれる。その車は現在、漣研究所の前に停められていた。

「おっす、おはよー」

車の運転席に座り、窓から身を乗り出している短髪の快活そうな男は須見だ。

その隣の道路に立つ白衣に無精ひげの男、星野も軽く手を振ると、テツの隣のリリーが大きく手を振った。

「連れてきたよー」

「ご苦労様。おはよう、テツ。気分、体調は大丈夫か？」
「問題ない」

事無げもなくそういつて見せたテツはすでに眠気も失せ、無感情無表情に落ち着いていた。

星野は頼もしげにうなずくと、テツに近づいた。

「結構だ。テツ、これを」

「これは？」

「『マグネシウム』。金属の一種だ。あとこれも」

「…これは、ライターか」

「いいか、この金属をライターの火で熱すると…」

「テツ、これから行ってもらうのはごく単純な任務だ。なに、誰にも気兼ねしないで胸張ってやればすぐ終わるもんだ。リリーの案内

で資料室に向かってもらおう。で、そこにある資料を取ってくるだけでいい。資料の目印は赤い表紙だ」

冷たく暗い印象を醸し出すコンクリートの壁に間じ切られた研究所内は須見が押した電灯のスイッチでほんのりと浮かび上がった。

電灯が切れ掛かっているのか、時折暗闇へと引き戻される部屋の中。しかも完全に電球の死んでいるところは真っ暗のままだ。

「まだ電気が通っているんだな」

「そーね。比較的最近まで使われてたって話だし」

二人は周囲を見回しながら、リリーが先を、ハルシュが後ろを歩いて進んでいく。

「今回の任務、ま、緊張してないみたいだけど…簡単な任務って言うか、子供だましみたいなものなの」

「子供だまし？」

「お宝探してみたいな…危険もないし」

電灯の光が届かない暗闇に蠢くのは虫の類か、時折テツの耳に羽音のような音が聞こえていた。

「あなたは どうして博士と協力している」

「…なんで気になるの？」

「俺は今、どういう経緯で皆がこうして金属人間になったのかを知りたい」

テツはそれを自分の糧として、新たな知識として、生かしていくつもりだった。情報は多いほうがいいという自分の考えを表に現した形になる。

リリーは薄く笑って、次に困ったような笑顔になった。

「うん…あんまり話したくないんだけど」

「無理にとは言わない。話したくなければ話さなくて良い」

付け足したテツの言葉に彼女は目をまん丸にして、それからこりと微笑んだ。

「うん、ありがとう……何か、聞いてたのと全然違うね」

テツは自らを指差した。

「俺のことか？」

「うん。いろいろ聞いてたんだよ？君は感情が全く無いとか、まるで機械みたいだって」

「しかし俺を除いた金属人間はたいてい感情を有している」

「それは製法の違いなの」

「製法？」

「聞いてないなら教えられないけど、つまり金属人間へのなり方の違いって事」

「……」

「もー、そんな顔しないで。金属人間へのなり方は大まかに二つに分けられるの。私達と君に分けると、私達は普通の人間がリングを飲み込んだものってことなの。君はどろどろに溶かした金属の中に2つのリングを投げ入れることで生まれる」

この2種類を大別して、人間がリングを飲み込む第3類金属人間、溶解した金属の中にリングを投げ込む第2類金属人間とする。

「なるほど」

「わかってくれたかな…説明苦手なんだ」

「製法の違いというよりは、人間により近いのはどちらかという」とだな」

「ま、まあ、そうなんだけどさ」

リリーは、思案に耽っていたテツの肩をぼんと叩いた。

「もー、元気出して！あんなに綺麗な陽子さんと可愛いカガクちゃんに囲まれてるんだから、充分勝ち組よ？」

「かちぐみ…」

テツが一言つぶやいた。その瞬間、リリーの腕を引きT字路の陰にテツは隠れた。

「隠れて」

「な、何？どうしたの？」

鋭く尖ったテツの瞳に息を飲んだリリーに、テツは真っ直ぐ、壁を切り取るようにしてそこに存在する真っ黒な扉を指差した。

「あの扉の向こうに金属人間が居る。誰かは分からない」

「！…わかった。ちよつと見てくるね」

「しかし危険だ」

「心配しないで。私それでも『アルミニウム』の金属人間よ？」

彼女が言うや否や一歩踏み込むと、猫のように軽やかな動きでその扉に近づいた。

テツの目線の先に、リリーが姿勢を低くする扉の前の近くに崩れた壁とそこから僅かに零れる光が見える。

爪先立ちでちょこちょこ歩いてそこに近づいたリリーはこっそりと

中の様子を伺っている。

しばらくして舞い戻ったリリーは声を潜めた。

「噂では聞いてたけど…あれは『タングステン』の金属人間ね」

「『タングステン』」

「最強の金属よ」

原子番号74、タングステン（元素記号：W）。

融点約3400、沸点約5000以上！全ての金属の中で最も融点が高く、その恐ろしいほどの硬度は鉄を砕くことなど容易い！最強の金属の名に恥じぬ一撃必殺の力！それが、タングステン！

リリーは先ほどまでの軽い笑顔を完全に消し、口に細い人差し指を当てながら眉を顰めた。

「いい？絶対に戦っちゃダメよ。私たちじゃあいつには勝てない」

「しかし、向こうもこちらに気づいているはずだ」

「……そう。だから逃げなきゃ」

かつん、と足音が一つ沈黙の中に木霊した。

機敏に振り返ったリリーの後ろ、首を伸ばしたハルシュは、真っ直ぐに視線を飛ばしてくる一人の少女が居ることに気がついた。

生気の薄い灰色の眼がこちらを見つめる。暗い灰色の髪が肩ほどまで切り揃えられ、左右対称の顔はテツとよく似て、際立って美少女と言うわけではないがとにかく整いすぎている顔である。

そんな黒衣に身を包んだ少女はテツの姿を見て、僅かに頷いた。獲物を見つけた肉食獣のように。

「女の子…？」

「……あなたがFeか」

その一言とほぼ同時、殺気がテツの皮膚をしびれさせた。一步飛び退いたその場所に腕から伸ばした灰白色のハンマーが振り下ろされていた。

轟音とともにはじき出された石片がテツの顔に当たる。その威力はコンクリートの床を陥没させることなど容易かった。石片に切り裂かれたテツの皮膚に真つ赤な血が滲んだが、すぐにその傷は鈍色になった。傷口が金属化して出血を抑えているのだ。

「あなたのリングを貰う。それが私の任務だ」

「テツ、こつち！」

思わず振り向いたテツの視界に、先を行くリリーの背中。テツは走った。シュルルという蛇の這うような音が背後から追ってきたことに気づいた瞬間、地面を蹴って天井の電灯に飛びついたテツの足元を薙いだWのハンマー。それを見たテツは何か割れる音を聞いて瞬間宙に放り出されたテツは強かに腰を地面に打ちつけた。テツの体重に耐え切れなかった電灯が天井から外れてしまったのだ。

その隙を見逃すまいと駆け寄るタングステン少女がいったん右腕を身体に引き寄せると、そこに巻きついたハンマーがぐによくよに伸びていき、再びその右腕が前に突き出されたと同時に触手がテツを捕らえようと空を切り裂く。テツは姿勢を崩したまま、地面を転がってその触手をかわしたが、当然逃げ切れるものではない。空中でテツのほうに先端をじろりと曲げた触手が、さらに伸びようとしたとき。

通路の陰から風のごとく飛び出したリリーがその触手を蹴飛ばすと、方向を変えられた金属の手が壁に激突した。

「ばさつとしないで」

厳しい物言いをしたリリーは、対面する少女を睨んだ。

「私が惹きつけるから、逃げて」

「大丈夫か」

「要らない心配」

駆け出したリリーに、即座に反応した少女の腕から伸びた金属のヤリが飛ぶ。それを上回る速度でリリーは一步、それだけで金属のヤリも少女の上をも飛び越えてしまった。

「速い」

原子番号13、金属人間の中でも異質、アルミニウム（元素記号：Al）！

全身の筋肉、骨、内臓といった部分をアルミニウムに変換することで、強靱かつ軽量な身体が出来上がる！その速度は目眼で捕らえきれるか否か！

「あんまり直接攻撃は得意じゃないんだけど…それっ」

少女が振り向く前に、その背中にリリーが蹴りを叩き込む。しかし、少女は微動だにしない。

「や、やっぱし？」

振り向きざまに少女は右腕の触手を分裂させ、逆袈裟がけに空を切り裂いた。

リリーが跳ねた着地点、そこから左に跳んだ後、着地点はトゲで貫かれ、挟まれていた。

Wの少女から発せられる殺気が部屋の中を静かにうごめいていく。

彼女がリリーへと向き直った瞬間、彼女は両手を横に広げた。各手からそれぞれ5本、指ごとに金属の針が延びていく。それはリリーが動く間もなく、リリーの行動範囲をWの線で部屋の隅に囲んでしまった。

少女が一步、リリーに近づくことに壁が金属の爪で挟られる。壁には5筋の跡が残されていく。

少女はなおもリリーに近づいていく。

その背後に、拳を振りかぶったテツの姿に気づかずに。

ゴギヤアアアッツ

金属同士が派手にぶつかる音が響いた。テツの一撃で前のめりにバランスを崩した少女の上をリリーが一息に飛び越え、天井を蹴ってテツの傍に降り立った。

「Fe」

無表情だが、声に怒気が籠る。テツは一步引いて身構え、真っ直ぐに少女の目を見つめ返す。

「俺はテツだ。リリー、大丈夫か」

「どうして」

半ば呆然としたリリーの声を掻き消すように、テツは一步二歩、踏み出していった。

「テツ！」

テツはさらに地面を後ろに押した。対する少女は伸ばした爪を一本にし、腕に巻きつけたまま一步も動

かず待ち構えている。テツは拳を握り、動かない少女の顔面に一撃を叩き込んだ。

グワキイイ

地面を削り、ようやく止まった少女が仰け反った顔を戻した。その顔は、テツの拳が直撃したところを中心に銀色に光り輝いていた。反対に、殴ったテツの拳は肉が裂け、流血を抑える金属の蓋が輝いていた。

「効かない。あなたの金属では私の身体を破壊することは出来ない」
「……」

少女が腰に溜めた拳が銀白色に輝いた。

少女に真っ直ぐ放たれたその拳を、右手を鈍色にしたテツが真っ向から打ち返した。拳と拳がぶつかり合い、空気を鈍器で殴ったような衝撃が空間の塵芥を一掃していく。WとFeの拳同士は、互いにヒビ一つ入らずその硬度を誇りあっていた。

両者の表情は違うものになり、少女は驚愕を、テツは苦渋を。

「なに」

（部分硬化、なら対抗は可能！だが…）

各残存金属

Fe：68・4% 57・9%

W：92・2% 92・1%

テツが痛みに痺れる拳に力をこめた瞬間、少女はそれを利用し後ろに跳んだ。距離をとった二人は互いに動かなかった。

（やはり効率が悪すぎる…俺のは欠片を弾き飛ばしたに過ぎない！）
（Fe、まさかWと同等の力を持っているとは。迂闊には攻め込めない…）

タングステンの少女は意外に慎重だった。このまま攻め続ければ彼女の勝ち揺るがないのだが、事前情報、そして彼女が碎いた経験を持つFeという金属が自分のWと同硬度を誇っていることが彼女の足を止めていた。そしてテツもまたこちらから攻め込むとあつという間に金属欠乏に追い込まれることは目に見えていた。

しかしこの勝負の決着はすでに見えている。長期戦であれ、短期戦であれ、どう転んでもテツに勝ち目は無い。

（Fe、何故動かない？それなら、少しずつでも様子を探りながら…）

少女は触手を伸ばし先をぐるぐると団子状に固めた。テツが思わず跳んだその下を全力の一撃が薙いで行った。

「ぐっ」

すぐに帰ってきた一撃が空中のテツを弾き飛ばす。凄まじい勢いで壁に激突したテツの身体は壁を2枚ほど突き破り、3枚目の壁に弾かれてテツは地面に落ちた。

「っ…くそ」

「……畳み掛ける！」

一歩、あえて踏み込んで頭上に招きこんだテツは全力の拳を細くしたその触手にぶつけた。一筋、走ったヒビが触手をへし折ってしまった。それが地面にゴスリと落ちた。

各残存金属

Fe : 57 . 8 % 38 . 0 %
W : 92 . 1 % 75 . 1 %

「しまった」

「ぐっ……」

触手攻撃を諦めて、少女は拳を灰白色に固めて直接戦う意思を見せた。すぐに跳ね起きたテツだが劣勢は相変わらず、そして残存金属の欠乏を彼自身が強く感じていた。

テツは常に3割ほどの金属を身体に収めておかなければならない。

（どうする…どうする）

頭を一瞬のうちに駆け巡る考えの中でも、一際大きくなる願望にテツは気づいていた。

『戦え』

戦いを渴望する自分の頭。心。身体。勝てぬ戦いを理解しながら、それでもテツは目の前の少女に戦いを挑むつもりだった。

テツは片目を閉じた。

少女がテツに向かう瞬時にテツも駆け出した。テツのその無謀な前進が少女の心に、得体の知れない恐怖を生み出した。彼女から見れば、力も互角に近いはずなのに。臆した気持ちが一瞬、少女の足を完全に止めてしまった。その一瞬、一筋の光芒が横から少女の横面を思い切り弾き飛ばした。

「ぐっ」

「リリー！」

思わず足を止めたテツが叫んだ名前の少女がふんわりと地面に降り立つ。Wの少女は大したダメージも無いが、彼女の心には確実に消耗が存在していた。

「無事？まったく、無茶しちゃって」

「リリー、ありがとう」

テツは片目を硬く閉じながら、リリーにお礼を言った。

「…何故、目を閉じている」

身構えながら、テツに言葉を飛ばした少女に、彼は何の答えもしない。開かれた右目の輝きがゆらゆらと揺らめいている。

「何故片目を閉じていると聞いている！」

苛立つ少女の前で、同じくリリーもテツと同じ左目の目蓋を下ろした。苛立ちも頂点に達して、地面を押した瞬間。

テツがポケットから二つの物を取り出した。一つは5センチ四方の銀色の金属板。もう一つは、青色の100円ライター。それはまさしく瞬きをする暇も無い時間。テツは、その金属片をライターで燻した。その瞬間。

「うっ」

眩い白い光が金属片を燃やし尽くしながら広がり続ける。そのあまりの眩しさに、Wの少女は全ての視界を失ってしまった。

（目…が見えない！見えない…真っ白…）

その隙にこの場を遠ざかる足音。少女はその音を聞き逃さなかった。

「上手く行っただね！」

「ああ。星野さんのおかげだ」

脱出に成功したことで心が安らいでしまった二人は、接近する金属の細い触手に気がつけなかった。

「きゃっ」

「リリー、だいじょう…！」

絶句したテツは、リリーのふくらはぎ辺りからの血に滲む金属の細い触手を発見した。

「…逃がさない。音は聞こえている…！」

呻くようなWの少女の声と共に、彼女は壁に片手を付きながらじりじりと歩き寄ってきた。

「くそっ」

テツはこの触手を切断するためには部分硬化しかないと理解していた。

すぐに拳を握り、全力の部分硬化をしようとしたテツの視界がぐら

りとゆがんだ。

残存金属

Fe : 38.0% 33.3%

(しまった……金属が足りない……！)

テツの拳を鈍色に鋭く輝かせる部分硬化もそれに合わせゆらいでいく。テツの拳全体を覆っていた鉄が瓦解しようとしたのを、テツは自らの意思で何とか押さえ込んで、部分硬化を維持することに成功した。

(振り下ろすだけなら、問題無い、大丈夫。奴らの狙いは、俺だ)

そんな考えが頭を過ぎる。瞬間、

「無理すんな、テツ！」

突然のその一言でテツの右手の部分硬化が解除された。膝を付き顔を上げたテツの目の前に、不適に笑う青年。

「須見」

「須見！」

「間に合って何より」

軽く手を上げた彼の右手に、薄く透明の刃が煌めいた。その右手が振り下ろされた瞬間、リリーの足に絡みついてた触手がすぱと両断され、リリーは自由を取り戻した。

「よ、かった……」

「ああ」

奥歯を噛むWの少女に、須見がすたすたと近づいていく。無防備な前進だが、先ほどのテツの前進とはまるで訳が違っていた。

「手を引けよ、姉ちゃん。俺と戦えば怪我じゃすまねえぜ」

「……そういうわけにもいかない」

「そっか。残念だ」

須見は真っ直ぐ一直線に、Wの少女の傍まで前進する。

Wの少女が振るった触手を寸分動かず、須見の腕から生えた透明の、光を受けて乱反射する輝きの腕が受け止めた。

「ダイヤモンド！須見の得意技！」

原子番号6、炭素（元素記号：C）！

黒鉛に代表される、有機物として全ての生物の身体を構成する基本元素！

結晶構造をとることにより、人体組織をダイヤモンドへ変換することができる！万能、臨機応変！

須見は軽く腕を振るった。弾き飛ばされたWの触手が壁にめり込んだ瞬間、動きの取れなくなった少女に須見が肉薄した。

一撃、鈍い音を残して少女は瓦礫の山に突っ込んでいった。すぐに少女は身を起したが、劣勢は明らかだった。

「……っ」

「ちよっと出てくるのが早かったな。もう少し訓練してからの方が良かったんじゃないか？ま、うちも人のこと言えねーけど」

「？」

「あなたのこと」

「ああ」

「…どうも外野がうるさいな…」

いまいち雰囲気に乗らない戦いに不満げの須見だが、彼の表情が一変した。その理由はテツにも知れていた。

「須見」

「…ああ。分かってる」

廊下の陰の暗闇から、すうっと姿を現したのは、年若き一人の美麗な女性であった。

「離れて」

Wの少女の傍に立った、黒に近い灰色の長い髪を電灯の下に晒して、女性は厳しい表情で須見を睨みつけた。

「いったん引くわ」

「でも、任務が…」

「テンス」

食い下がろうとした、テンスと呼ばれたWの少女は、無表情のまま頷いた。

「…わかった」

「そー簡単に逃がしてたまるかよ。タンゲステンなら、こっちは喉から手が出るほど」

そう言い掛けた須見の目の前に、テンスを背中に守る女性の強い視

線。

「ごめんなさい。この子、大切な子なの」

「はあ？」

彼女が軽く、足元を踵で叩いた。

ゴバツ

瞬間、足元の床が畳み返しのように持ち上がった。

須見は瞬時に反応し、右腕から伸ばした透明の腕を石板に叩きつけた。

グシャアアア

一撃で爆砕した床の向こうに、すでに二人の姿は無かった。

慌てて少し走って周囲を見回す須見だったが、ちょこまかと動き回る様子なので何も発見できなかったようだ。

「あっさりと逃げられちゃった…」

「しかも怪我ですんだな」

「そーよねー、嘔吐きよねー」

「こらあ！」

テツは、須見がけらけら笑うリリーに食って掛かる間にもずっと考えていた。

決意の表情をした女性が残した言葉の意味を。

「大切な子…」

呟く言葉は、その疑問の矛先。

「テツ。騙されてんじゃねえ。大切な人を戦いに向かわせる馬鹿なんかしらねえよ」

須見はそう言つて、彼の怒りがテツには見えた。

「それを平気で出来ることは、あり得ないことじゃないと思う」

テツはそう思っていた。

「そいつが人間じゃないならな」

「レアメタル達は金属人間だ」

「やめて」

悲痛な声が二人の視線を釘付けにする。リリーは、泣き出しそうな顔だったからだ。

「私たちは人間よ！私も、須見も、レアメタルも、あなただって！……すまない」

金属人間は人間とは違う存在だと思うテツ。だから命を粗末にすることなどどうとも思っていないのではないか？自分がそうであるように。

金属人間も人間であると言うリリー。彼女はだから、人間の良心は誰もが持っていると確信しているようだった。そしてそのことを、確信的に信じているかのようだった。

そのことを悟ったテツは素直に謝った。

「……いや、こっちもむきになっちまったな。あははは、大人気ねえ

や」

須見は軽く笑って、二人の先を歩き出した。

「とにかく、帰るぞ。テツは金属補給もしつかりしなきゃな」

「ああ。…赤い表紙の資料はどうする」

「いいの。どうせ、ご苦労様しか書いてないんだよ」

答えたのはテツのみ。

押し黙るリリーは先に行く須見の後ろを離れてついていく。

先に行く須見の隣に追いついたテツに、須見が小声で話しかけた。

「一度へそ曲げるとなかなか直らないからな、あいつ」

「…なぜあそこまで怒っているんだ」

「あいつな、自分の意思で金属人間になったわけじゃないからな」

「そうなのか？」

「あいつは人間になりたいんだ」

金属人間が人間でないものと認めてしまえば。

自分は人間ではなくなってしまう。

金属人間であるものは、その自我を守らなければならない。

「じゃあな、今日は二人ともゆっくり休めよ」

「ああ」

「…うん」

リリーとテツは、二人で帰路に着いた。

金属欠乏寸前まで追い込まれていたテツは須見に与えられた鉄材を大量に摂取して内臓金属は90%を超えていたが、金属人間には金属欠乏に近くなると、不意に気を失うといった事象が存在している。だからリリーがテツを見守りながら、彼の家まで送り届けるということだ。

直接須見の車が漣家まで向かわなかったのには、もちろん理由がある。

二人は夕方を通り過ぎた時間の住宅街を歩いていく。影はぐんぐんと伸びていき、次第に消えていくのだろう。テツの頬にはガーゼが貼られ、醜い傷跡を隠していた。

彼の隣を歩くリリーは、いつもの明るい表情を潜めていた。

「リリー、すまなかった」

「…もういいよ」

「もういいなら、いつも通りのあなたに戻っているはずだ」

「……」

図星を突くテツの物言いに、リリーは微かに顔を上げた。

「人間になりたいというのは本当か？」

「…須見ね」

ぶすつとした顔で、一度テツをじろりと睨んでから、リリーは前を

向いた。

「私は赤ん坊の頃、父に無理やりこの身体にさせられたの」

言葉が深く深く彼女の口から漏れ出していく。テツはそう感じていた。

「私の人生選択は初めから存在しなかった。だから、私は私の意志で本当の人間になる」

拳を握ったりリリーの横顔は、言葉通りの強い意思と、そして相反する危うさを併せ持っていた。

「どんな手を使っても」

「……」

「…ま、こんな話、あなたにしてもしょうがないけど」

「確かにそうだ」

ふうとため息を吐いたりリリーに、テツは真っ直ぐな答えを返した。

「そういう言い方していると、女の子に嫌われちゃうよ?」

「…あなたに嫌われるなら、改めるように努力する」

「え…ふふ、ありがとう」

予想外の言葉に少し慌てたような顔、微かに赤らんだ頬を微笑ませてリリーは笑った。

「この、天然タラシ」

「?」

肘で小突かれた理由が分からず、首を傾げるテツは、家の前で座り込む一人の少女を見つけた。彼女のことをカガクだとテツがわかったとき、彼女はゆっくり立ち上がった。

「テツ」

「カガク」

「お邪魔だろうから、ちょっと離れてるね」

そそくさとテツの後ろ側に移動したりりー。それを見やってから、テツはカガクに向き直った。

カガクはかなり不機嫌な顔つきで、傷ついたテツの顔をじろりと睨みつけていた。テツの頬のガーゼの下には、テンスとの戦いでついた鈍色に輝く傷跡がはつきりと残っていた。目立った傷は他にもいくつかあり、その何れもが出血を抑えるためだろう金属のふたに押さえられていた。

「また戦ってきたのね」

「ああ。戦いでボロボロになったんだ」

けろりと言い放つテツの態度に、カガクは激昂した。

「あんたね、何考えてんの！？あんたにうるちよろされて、迷惑するのはこっちなの変な噂だって流れるかもしれないし、それで私や母さんも同じ見方されたらどうしてくれるの！？」

「すまない」

テツは素直に謝ったが、カガクの怒りは簡単には収まらない。

「さっさと出て行ってくれたらこんな心配しなくていいんだけ

ど。ったく、どうしようも無いわね。…で、何かわかったの？」

テツは首を振った。

「特に何もわからなかった」

「無駄足、ってわけ？ ばつかみたい。そんなことだったら行かない
ほうがずっとかまし」

「ちょっと」

カガクは思わず言葉をとめて、テツの横に立つ静かに怒る少女の顔
を見つめた。

「テツの苦勞も、テツの気持ちも、何の関係も無いって言いたいの
？」

「……」

「テツが自分のことが知りたいから戦って、求めることでそこまで
文句を言われる筋合いは無い。向かおうとする意思を否定なんか絶
対にさせない。あなたみたいに、関係の無いところから嫌味を言う
ような人には」

リリーの強い瞳がカガクの意気を完全にへし折ってしまった。

「テツが何も言わないと思って、バカにしないで」

「わ、たしは…そんなこと…！」

「リリー、止める」

テツが二人の間に割って入った。

「ありがとう。でもいいんだ。カガクの言っていることは全て事実
だと思う」

「……ふん、それでいいの？」

「ああ」

「そっか、わかった」

リリーはさつと踵を返して、二人の傍から離れていった。テツは、複雑な表情を浮かべたカガクを見た。

「カガク、何も気にすることは無い。俺が悪い」

「……」

「当面はまだ安心できないが、俺はしばらくしたらこの家から離れるつもりだ。もう少し辛抱してくれ」

俯いていたカガクは、その言葉に返事を返すことができない。

しばらくそのまま黙ったままで、歩き出そうとしたテツをカガクは呼び止めた。

「テツ」

「何だ」

「……ごめん」

「気にすることは無いと言った」

「……」

「テツ君、カガク」

呼びかける声も柔らかな、陽子の姿がそこにあった。

「カガク、ほら。早く入らないと、風邪引いちゃうわよ。今日は冷えるわねえ」

「……わかってる」

気落ちを隠せないカガクの事を、陽子は何も言わなかった。彼女は

気がついていたのだ。

閉まる扉を見送った後、陽子は小さな声で真剣にテツに語りかけた。

「なるべく普通に接してあげて。あの子、あれで意外と自分を責めちゃう子だから…ね」

「…しかし、俺は普通に接していたつもりだったんだが」

「だったら、簡単に家を離れるなんて言わないで」

「何故だ？」

「あの子、あれでも君のこと気に入ってるのよ？あの子のせいで君が責任感じてたら、あの子は傷ついちゃうから。それに、一度、あの子は君を…利用して見殺しにしようともしている」

陽子の口から紡がれた物騒な言葉をテツはしっかりと受け止めた。

「…わかった」

「そう。よかった」

「さ、家に入りましょう？お疲れ様」

「ありがとう」

笑顔の陽子はテツの背中をポンポンと軽く叩きにつこりと笑った。
テツはそれだけで今日の疲れが取れていくようだった。

「しかも、何と！」

「しかも？」

「晩御飯はハンバーグよ！」

「そうか」

「もつと喜ばないの？」

「どうやって」

「わぁーいって」

「わぁーい」

「そう！」

「さっさと入ればいいじゃない！外で何やってんのよ！？」

三人は傍から見れば、家族に見えたとか。見えなかったとか。

第8話 「V S W（タンゲステン） 人間」（後書き）

リリーとテツの会話、カガクとリリーの会話、須見とテツとリリーの会話。そしてテンスとの戦い。女性、コバルの登場。今回は大体それぐらいでしたね。また次回！

第9話 「幼馴染」(前書き)

テツとリリーはWの金属人間^{タンクステン}の少女、テンスと戦った。レアメタルたちはテツの『リング』を求めている。一方、カガクは自分の中でテツのことを軽視していた事実^{事実}に気がつく。

第9話 「幼馴染」

ここは都内のコンビニ。豊富な品揃えが特徴のコンビニの中には、それを求める多様な客が揃っている。

「あゝあ、折角の休みに、何でこんなことに…」

お菓子売り場の前、ぽつりと愚痴を漏らす背中ほどまである黒髪を後ろで束ねた少女の視界には、商品が陳列された棚を興味深げに覗きこむ、ぎざぎざした鈍色の髪の少年の姿が。

「値段の設定というものはどうやって決まっているんだろう」

「知らないわよそんなこと」

「材料費はどれくらいだろう」

「知る訳無いでしょ」

「この箱の形はどうやって」

「うるさい！しつこい！」

漣 カガクと漣 テツの二人は、自宅の周辺を散歩していた。

テツがWと死闘を演じてから2週間近くが経過していた。その間は特に何事も無く、漣家の三人は平和に生活を送っていた。

冒頭の場面の説明をするには、時刻は数時間前、漣家の朝の風景まで遡らなければならない。

朝食を片付けた後、後ろ手に何かを持った陽子は軽い足取りで、ソファーに腰掛けて朝のニュース番組を食い入るように見つめる少年の所へ歩いていく。

「テツ君、ここら辺のことってあんまり分らないんじゃない？」

「ここら辺？」

「この、田間市ベッドタウンのこと」

陽子はテツの隣に腰掛けると、にこにこ笑った。

「…確かに、詳しくは無い」

「そう思って、ほら」

「これは？」

「地図よ。私の知り合いの幼稚園の先生に協力してもらって、そこの子供たちに描いて貰ったの」

陽子がテーブルに広げて見せた、よれよれの画用紙には、クレヨンでぐちゃぐちゃに描き殴られた地図らしきものがあった。遠めに見て漸く判断できるといったレベルのもので、地図の周りの空白を埋め尽くすようにチューリップやら何らかの怪獣やら太陽やらがごみ

ごみと存在している。

テツの眉間に皺が寄った。

「嫌？」

「まず、方向感覚が狂いそうになる。線をともに引けない連中が地図という正確でなければならぬ物を作ろうという段階で無理がある。それに、こんな馬鹿げたでかさの怪獣を俺は知らない。加えて、だいたいこのへんと言う言葉が地図上には存在しない。してはいけない」

「まあ、そうでしょうねー」

「陽子さん……わざとか」

「え？」

テツの疑いの眼差しを知ってか知らずか、陽子は机上の地図を丸めてテツの手に渡した。

「そこで！よ」

「何だ」

「テツ君には、この辺りの事に詳しくなって欲しいの。色々便利だし、これからここで暮らしていくわけだしね」

テツはうなずいた。一理あると思ったからだ。

「もう案内役も考えてあるのよ」

「？」

「お母さん、電球買つといってくれた？」

そこにひょっこり現れた、陽子の娘の力ガク。
テツと陽子がそこに顔を向ける。

「タイミングよくやってきたわね」

「え？」

「……案内役か」

再び時間は数時間後へ。コンビニを出た二人の手には、それぞれペットボトルの飲み物が握られていた。

カガクが陽子の突拍子の無い提案に首を横に振らなかったのは、理由がある。それは彼女の、漣 テツに対する後ろめたさの感情であった。

『テツが何も言わないと思って、バカにしないで』

「……」

彼はまったくと言っていいほど感情を表に出さない。

だから彼が本当に怒っているのか、傷ついているのか、何もわからない。

ただそれでも、リリーの言葉がトゲの様にカガクの心をチクリと痛ませ続けていた。

自分はどこかで彼のことを蔑んでいたのか？

カガクは仏頂面を浮かべながら、自分の思いを肯定しようとしていた。

それでいい！もともとこいつは私のことなんかどうとも思っていないはずなんだ！

『俺はあなたと陽子を守るために戦いたい』

その出口も塞いでしまう、彼自身の言葉。

そしてカガクは、自分がいちいちこんなくだらないことで悩んでし

まっていることにさらに自己嫌悪を感じていた。

ふと、隣のテツが立ち止まった。

遅れてカガクも立ち止まり、彼の顔をいぶかしげに見上げた。彼は視線を足元に向け、腰を曲げた。

彼は自らの足に貼り付くように飛ばされてきた一枚のビラを手にとった。

「これは？」

「…人探しのビラ、みたいね」

カガクはその写真に眼を剥いた。慌ててテツの手からビラを奪い取り、まじまじと眺めた。

「辿子…！」

「知っているのか？」

「うん…幼馴染だったの」

現に漣家のすぐ近くに、この京葉 辿子の家は存在している。

カガクは彼女の家族と、昔は親交があった。

彼女と辿子は親友といってもいいほど仲がよかった。

その繋がりが消えたのは彼女たちのもう一人の幼馴染が引き起こした殺人事件によるものであった。

カガクがその事件がきっかけでもう一人の幼馴染と一切の関係を断ち切ったのに対し、辿子だけは親に反対されようが、変わらずその彼と親交を続けていた。それを知ったカガクは彼女が信じられなくなり、次第に二人は疎遠になっていった。

カガク自身も最後に会話をしたのは何時ごろのことだったかすら覚えていない。

中学も別々の場所へ進み、高校が同じになったが、カガクは話す気にもならなかった。

辿子のほうが何を思っていたのかは知らないが。

「……ねえ、ちょっと手伝って」

「何を」

「この娘を探すのを。どうせ暇なんでしょ？」

「ああ。わかった」

「じゃあ着いて来て。ほら」

「何処に向かうんだ」

「この子の家！」

カガクの記憶の中の場所が変化していなければ、今も辿子の家は同じ場所にあるはずである。

表札に『京葉』と記された、立派な一軒家の扉が開くのを待つカガクとテツ。

カガクがインターホンを押してからしばらく、突然に扉が開いた。

「お姉ちゃん!？」

「あ……」

「…………あ、ごめんなさい…………」

中から飛び出してきたのは、小学生ほどの女の子で、一目見て可愛いと言える目の大きな可憐な顔立ちをしていた。人違いだと気づいたのか、表情は次第に曇っていく。

そして彼女に、カガクは懐かしい感情を抱いていた。

「菜々（なな）ちゃん？…大きくなったね」

「え…？…あ…カガク…さん」

『カガク、絵本読んで！』

『うん、いいよ。さ、座って座って』

彼女は京葉^{けいよう} 菜々（なな）。京葉 辿子の妹である。

カガクは菜々の言葉を聞いて、少し悲しくなった。

辿子には一人の妹が居て、よく彼女と遊ぶときに、こっそり様子を伺いに来たものだ。

その妹、菜々はカガクが大好きで、よく遊んでもらったので懐いていた。カガク、と呼び捨てにするほどに。

カガクと辿子の親交が途絶えてからは、当然のことながらカガクと菜々の親交も消えうせてしまっている。その隔たりは5年という長い時間。菜々は5歳から10歳になり、カガクも10歳から15歳になっていた。容姿も、性格もきつと、昔とは違うのだろう。

「お前は辿子の妹だな」

横からぬうつと現れた見知らぬ緑目の少年、テツに恐怖を覚えたのか、菜々は僅かに後ずさった。

「静かにしててって言ったでしょ!？」

菜々はその少年が握る一枚のビラを見た。その瞬間、彼女の表情がゆがんだ。

「菜々ちゃん？」

「あのっ…お姉ちゃん、見ませんでしたか!? 行方不明になって、もう2週間も帰ってなくて…ケータイも繋がらなくて」

だんだん声が震える菜々の後ろから、一人の陽子と同年代ほどの、疲れだろつか隈の走るくぼんだ目をした女性が現れた。

「どうしたの、菜々。お客様？」

「あ…おばさん」

その女性はカガクを一目見ると、表情をやわらかくした。彼女は息子と菜々の母親、綾^{あや}である。

「あら…まあ、久しぶり。大きくなったわね」

「はい、ご無沙汰しています…それで、あの」

彼女は、カガクの隣で見知らぬ少年が広げて眺めているビラを見てカガクの用件を悟った。

「…家の子、二週間前から帰ってこないの。カガクちゃん、知らないかしら」

「あの…ごめんなさい。さっき知ったばかりで、心当たりも全く…」

その言葉にあからさまに落胆した菜々は、肩を落として家の中に戻っていった。

「そう…いえ、ごめんなさい、ありがとう。うちのお父さん、警察官だから。すぐに見つかると思ったんだけど…」

「おばさん、その…何て言ったらいいのか、わからないけど…」

「ありがとう、カガクちゃん。昔からあなたは優しい子だったわね」

照れてしまうカガクの隣、二人の会話を眺めていたテツが口を挟んだ。

「京葉 凧子に関して何か情報は無いのか？」

「あなたは…？」

「漣 テツ」

「あ、その、遠い親戚っていうか、…祖父の、知り合いの…いや、その」

しどろもどろどうにか説明しようとするカガクをじっと見つめるテツの様子を目の当たりにして、それ以上の言及は無かった。

「そう…実はね、最後にあの子を目撃された方の話によると、梅木くんみたいな人が傍にいたって…」

「！」

綾の言葉に、カガクの表情が一変した。

「梅木？」

「……やっぱり、無理にでもあの子を遠ざけておくべきだったのかしら。こんなことになるなんて…」

「……」

「誰だ」

「ちよっと黙って」

「…ごめんなさい、愚痴っぽくなっちゃって。カガクちゃん、何かになることがあったら、どんなことでも伝えてくれる？」

「はい、私のほうでも、探してみます…それじゃあ。おばさん、菜々ちゃんにも、その、元気を出してください」

「ありがとう…本当にありがとう」

綾は微かなため息を一つ吐いて、家の中に戻った。

そんな彼女を迎えた、痩せ型の中年の男性。丸い眼鏡をかけた、目つきの鋭い男だった。

「誰が来たんだ？」

「ほら、昔辿子とよく遊んでた、漣さんのカガクちゃん」

「！……」

「あなた…どうかしたの？」

「どうもせん」

男は多くを語ろうとせず、2階へと上っていく。綾は今度は深々とため息を吐いた。

男の姿は書斎にあった。彼の日課は一日に数分でも数時間でも机に向かい、何らかの本を読むことであった。その彼は今机に向かい本を読むのではなく、一枚の写真を眺めていた。それは家族4人で撮った写真だった。男と綾、夫婦の二人を挟むように、辿子と菜々が満面の笑みを向けている。

「辿子……お前のことを思えばこそ……」

彼は京葉 辿子の父親、京葉 守。^{まもる}彼は警察官である。無論、骨の髄までそうという訳ではない。

先を行くカガクは早足に歩き続けていた。

「梅木は私と辿子、3人で幼馴染だった。それだけ」

「その梅木は辿子に会っていたということだな。誘拐されたにせよ殺されたにせよ、関係がありそうだ」

振り返ってテツを睨みつけるカガク。むき出しの感情が彼女の顔に表れていた。

「……辿子はね、明るくて、優しくて！誘拐とか殺されたりなんかされるような子じゃ……！」

「明るくても優しくても誘拐も死ぬことも可能だ」

無機質なテツに激昂したカガクは平手でテツの頬を張った。しかし身体が鉄で出来ているテツには効果があるはずも無い。代わりに激痛がカガクの手のひらを縦横無尽に駆け巡っていく。

「……」

力を込めすぎたと実感したカガクは後悔の中テツの動向を見守ったが、張られた側の頬を僅かに赤くしたテツは涼しい顔だった。

「すまない。また気に障る言い方をしたようだ」

「……、こつちもごめん、イライラしてるだけだから」

気持ちがまとまらないカガクは感情に任せてテツを殴りつけたことを悔やんだが、テツは何もおきなかったような顔で、

「その梅木の家の位置はわかるか？」

「わからない！……ちよつと前に引つ越したきりだもん」

「そうか。なら引つ越す前の家は」

「それなら、わかるけど……今は別の人に住んでるかも知れないけど」

「それと、手は大丈夫か」

「……心配ない」

二人は梅木の住んでいたマンションの前までやってきた。7階建ての古いマンションの一室が彼の実家だという。

「ここか」

「……こここの三階の、一番奥の部屋」

カガクの言葉に元気は無い。テツはその理由を聞こうとはしなかったが、彼はカガクの言葉の後、しばらく押し黙ったまま彼女の反応

を待っているようだった。

「…何？」

聞き返すカガクの目を見るテツ。数秒後、カガクが目を逸らした。

「な、なんだって言ってんの」

「カガクはどうする。ここで待つか」

意図の外の言葉に一瞬呆然となったカガクは、すぐに反論しようとする強気の顔になったかと思うと、ふっと表情を消して俯いてしまった。

「…私は、ここで待ってる」

「そうか」

テツは一人ですたすと歩いていった。カガクはその背中を視線だけが追い、身体はそばの植え込みに腰掛けていた。

（……気を使ったのかな。あいつ……まさか…ね）

そのことが何故か少し嬉しくなって、カガクは薄く微笑んだ。その笑顔もすぐに消えた。

テツは三階の一番奥の部屋まで足を運び、インターホンのボタンを押した。

電子音が響いた10秒ほど後、扉が静かに開いた。

「はい…」

「梅木を探している。ここは彼の実家なんだな」

「まさか…轍を？…あんたは？」

「俺はテツだ」

「…んん？」

中から出てきたのは、白髪交じりの恰幅のいい壮年の男性だった。怪訝な顔つきの彼の前に、テツが人探しのビラを突きつけた。

「梅木の友人の京葉 辿子が行方不明になっている。最後、この二人と一緒にいる姿が目撃されている。情報がほしい」

「…あ、ああ。よく分かったよ。あんたの探してるのは、梅木 轍だな」

「俺と同じ名前だ」

「そうなのかい？」

男はポケットから煙草を取り出すと、太い指でその中の一本を咥えてドアの外まで出ると、ライターで火をつけた。煙を吐き出した後、男はテツに向き直った。

「俺は轍の伯父だ。轍の父親の兄貴だな」

「なるほど」

「結論から言つと…だ。俺は轍がどこに居るのかは知らん。あいつはずっと一人暮らしだ」

「そうなのか？」

「父親も母親も死んじまってるし、俺もこの部屋をずっと預かったまんまだし。助かってるけどよ…あいつが、またそんなことをやったのかい？」

「そうと決まったわけじゃないが。またというのは？」

「……」

その頃、階下では座って俯くカガクの下に、一人の純真そうな少年が現れた。

「あ、漣さん」

「あ……斉藤…君」

彼はカガクの同級生、斉藤 博^{ひろし}。クラスで学級委員を務める、自他共に認める真面目な学生である。

「買い物の帰り？」

「……まあ」

「そういえば、もうすぐ運動会だね。漣さんは何か出たい種目とかある？」

「……別に……」

カガクは小学校のある時期から、男子とだけ気軽に話せなくなってしまうていた。例外なく、『同年代の男』に恐怖を感じてしまうの

だ。

そんな男子と会話をするとき、彼女は目もろくに合わせられない。女子と話するときの活発な姿とまるで違い終始俯いているため、昔の彼女を知らない男子などは彼女のことを気味悪がっていた。加えて彼女の特異な名前がその感情に拍車をかけ、彼女に積極的に話しかける男子は彼女をからかうという目的以外ではほとんどいなかった。しかしこの斉藤君、カガクを気味悪がることなどなかった。誰にでも分け隔てなく接しることが彼の特長だった。彼は赤く腫れたカガクの右手を見て、仰天した。

「どうしたの、その手！？真っ赤だよ！」

「何でもない。ちよつと……」

「ちよつと待っててね。ここに僕の家があるんだ」

「あ、斉藤君。別に……」

カガクの制止を聞かず、彼はマンションの中に一目散に駆け出していった。

「はい、氷。握れる？」

「……う、うん」

カガクの右手の熱が氷によって冷えていく。カガクは心の中で、お礼を言わなければという心と、それにブレーキをかける心。二つがせめぎ合いになっていた。

「病院行った方がいいよ。かかりつけの病院、あるんだろ？」

「……うん」

心配そうにカガクを見おろしていた博の傍に、いつの間にか影ができていた。人型の影が博の頭上を覆っていた。

それに気が付いた博は、くるりと頭をそちらへ向けた。

感情の無い瞳が、真っ直ぐに見ていた。

「うわぁっ!？」

「テツ」

人形のような少年の突然の登場に心臓の音が余計に響く中、博は力ガクが落ち着き払っていることに気が付いた。

「カガク、行こう」

「…もういいの?…その、梅木は、居たの?」

「居なかった。というよりここには住んでいない」

「そう…何処に行ったのかな、辿子」

「…君は? 漣さんの知り合い?」

「俺は漣 テツ」

博はテツの言葉に出来ない迫力のようなものに圧倒されていた。

「さざなみ…って、苗字が同じ…親戚の人?」

「違う。だが彼女とは同棲している」

「どっ…!？」

「バカ!」

慌ててテツの肩を掴んだカガクがテツの顔を自分のほうに向けさせた。

「事実だろう」

「そりゃ、そうだけど! もうちょっと言い様ってあるでしょ!？」

「例えば?」

「うぐ…た、例えば…例えば…」

「他に無いんだな」

「考えてんの！」

カガクの表情がごろごろ変わり、博は彼自身が聞いたことも無いような大声のカガクを目の当たりにしていた。終始無表情の少年に食って掛かる彼女は、博にとって想像外の光景だった。

「もう質問が無いなら失礼する。行くぞ」

「あ、ちよつと…じゃあ、ありがとう…斉藤君」

「あ、う、うん。また…」

博は力なく手を振った。

「いい、今後私の知り合いの前では不用意に喋らないで」

「わかった」

「…ほんとに？」

「わかった」

遠ざかる二人の背中を見送って、博は自分の心臓が妙にドキドキしていることに気が付いた。

「あれが、漣さん…！？」

時として、ギャップは魅力の一つになり得る。

「その氷は？」

「さっきの人に貰ったの」

「そうなのか。痛むのか？」

「へえー、心配してくれてんの？」

挑発的な態度でカガクがテツの顔を覗きこむが、彼の顔に目立った変化は無い。

それどころか、

「ああ」

彼があまりに自然に頷いたので、カガクは自分が恥ずかしくなった。

「そ、それは…ありがとう」

「カガク。梅木が過去に殺人事件を起こしたというのは本当か？」

「！……」

「カガク」

「知らない。どうだっていいじゃない」

「…そうか」

あえて追求してこないテツの態度に、カガクは僅かな疑問を感じたが、触れたくない話題のことだったので僥倖と見たようだ。

カガクの脳裏に過ぎるのは、過去の記憶。

そのときだった。彼女が、自分の幼馴染がどこかおかしいことに気が付いたのは。

むせ返るような暑い夏の日、入道雲のさらに上から、太陽の光が照り付けてくる。

私はそれを覚えている。私は…そう、幼馴染と、それから母と一緒に、市民プールからの帰り道を歩いていた。もう一人の、辿子は、その日は一緒に来られなかった。たしか親の用事で一緒に行かなくちゃいけないって言っていた。

私たちは細い路地を歩いていた。

母の力では対抗できず、バッグはあっさり引っ手繰られた。男はそのまま走り去っていった。

『お母さんのバッグ！轍、取り返して！』

私は隣の幼馴染が心の優しい、そして身体は同年代の誰よりも大きなことを知っていた。

『わかった』

『待ちなさい、危ないから！』

母の悲鳴にも似た叫びにも関わらず、梅木はその男を追いかけていった。

『大丈夫だよ、お母さん。あいつ滅茶苦茶強いんだから』
『すぐに交番に行って警察の人を呼んできて！』

母は私の言葉を聞かず、轍の後を追おうとした。しかし2、3歩も行かないうちにその場にうずくまってしまった。

『お母さん！足、怪我してるの？』

『だ、大丈夫…大丈夫よ』

私は母の必死な顔に、慌てて、梅木の後を追った。

曲がり角を曲がって、次の路地の交差点の中央に梅木が居た。さきほどのスリに馬乗りになっていた場面を私は見た。

『やった！さすが、て……』

幼馴染の名前を呼ぼうとして、私はそれができなかった。

梅木は固く握った拳を振り上げ、何度も何度もスリの男の顔面に振り下ろしていたから。

『た、たすけ……』

『黙れ』

梅木が何故そこまでしなければならなかったのか、私には……分からない。

数分後、近所の誰かが通報したのか駆けつけた警察官が梅木を止めた。

「離してくれ。カガクに、鞆を…鞆を」

警察官に羽交い絞めにされる彼の姿。それを呆然と眺めている自分の姿。血まみれの拳。その手に握られた、母のバッグ。横たわるス

りの身体。ざわつく声。照りつける太陽。

引き鉄が何だったのか。

轍にそうさせたのは何だったのか。

カガクは今も答えを見つけようとしていない。

思慮の外に注意の向かないカガクは、二人の前方に立って軽く手を上げた男の存在に気が付かない。

「須見」

テツの声に思わず顔を上げたカガクの顔に、喜びの色が混じる。

「直人さん」

「おう」

須見はこちらまで歩いてくると、カガクの頭をくしゃくしゃに撫でた。

「お守りか？ 大変だなあ、カガクも」

「まあ… お守りと言うか」

「ん？ なんだ、デートか。いいなあ」

「ち、違うよ!！」

「あつはつは、冗談冗談」

けらけらと笑う須見は次にテツの頭を撫でようとして、怪訝な顔つきになりすると手を引つ込めた。

「刺さりそうだから…悪いな」

テツは口をつぐんだままぶんと首を振った。須見はテツの口を指差しながら、

「ん?どした、火傷でもしてるのか?」

「いや、不用意に喋るなと彼女に言われた」

「へ?」

ぽかんとした須見とぽかんとさせたテツの間に滑り込むように、力ガクが反論した。

「不用意に喋るなって言ったの!喋っちゃ駄目なんて言っていない!」

「あつはつは、不器用だな」

須見は力ガクの隣まで歩を進め、テツと視線を合わせた。

「それにだ、女の子の言いなりじゃあかっこつかないぞ」

「かっこつけると得があるのか?」

「そりゃあ、ある。色んな女の子にモテたりする」

「な、直人さん!」

「わかった。喋ろう」

力ガクが小さな声で、「えっ」と漏らした。

「須見はここで何を？」

「ん、いやな。こっちはデート相手に逃げられちゃったところなんだ」

「デート相手…！？」

「お前らと同じだよ」

なにか言いたげに口をパクパクさせるカガクの顔に笑みをこらえきれない須見は、続けてこう話し出した。

「にしても、聞いたぜお前ら。人探ししてるんだって？どんな奴なんだ？」

「あ、うん。この」

テツが広げて見せた一枚のビラをまじまじと眺める須見。

「京葉 凧子…か。しらねえなあ」

「私の幼馴染…なの」

「…へえ、そうなのか。でも、言っちゃあなんだけどな。お前らが探すよりは警察の人達に任せたほうが懸命だと思うんだ」

「……それは、そうだけど」

「変わってないな、カガク。優しいところは本当に」

カガクは俯いたままだったが、微かに首を振った。

「気持ちは分かる。けどさ、その為にお前が必死になって頑張っても結果は出そうに無いんじゃないかな」

「うん……」

「大丈夫、その子は無事だよ。あんまり確証無いことは言いたくねえけど、お前もそうやって信じてやらなくちゃ」

「……うん。きっとそれが一番なんだよね」

カガクは下を向いたまま先に歩いていく。それを見やった後、テツは須見の目をじっと見た。

「ん、どした？」

「何か隠していないか」

「…何だよ？」

「意図的に俺達を遠ざけようとしているように感じる」

「さあな。俺はただ単に、時間が勿体無いつて思っただけさ」

「…そうか、わかった」

テツは先を行ったカガクの後ろへ足を伸ばす。その背中を見送って、須見は苦笑した。

「あの娘は自分より他人を優先するタイプに見えたが…誰かが何かを吹き込んだ、ってことになるか…？」

帰り道は二人で、夕暮れの道を帰路とする。隣を歩くテツを見上げたカガクは、軽く微笑んだ。

「今日は無駄につき合わせちゃったね」
「お互い様だ。気にしていない」

そのカガクの瞳を真っ直ぐに、テツは無表情に見た。

「そりゃ、そうだけど」

「それに、あなたが辿子を探したいという気持ちはよくわかった。だから協力した」

「……」

「具体的な成果は得られていない。申し訳なく思うことも無い」

理屈っぽいテツのいいように、笑みを消したカガクは惔然とした顔で責めるように言った。

「わかってる。でも、もうちょっと普通に話さないよ」

「これが俺の普通だが」

「…もういい！」

そつばを向いたカガクの様子を見て、視線を前に戻したテツの口から零れた言葉。

「変えたほうがいいだろうか」

「……え？」

目を丸くしたカガクを見ようとせず、テツは歩いていく。

（……しかし。梅木 轍と京葉 辿子の失踪日、俺がこうして居る初めての日と同じ……）

偶然か、否か？

答えは無い。

「テツ……」

「何だ」

「……何でもない」

カガクはテツの僅かに揺れた感情に、反応した。カガクは聞き返さなかったが、テツの言葉は無機質な感覚を覚えさせるが、先ほどの言葉はいわば人間臭いのだ。カガクは自分でも分らないが、何故だか胸の中に晴れ晴れとした、爽快感、または意外な嬉しさといった感情を抱いていた。

その感情が顔に表れたのか、カガクは微かに笑っていた。そのカガクの顔を見て、テツが一言。

「なんだ、にやついているな」

「誰かにやついてんのよ!」

「漣さん」

二人の前に、自動販売機の前に立った落ち着いた印象を与える顔つき、一人の少女が居た。彼女の傍らには一台の自転車が止まっていた。

「…あ、知里^{ちり}…!」

「その人、彼氏?」

カガクの顔が耳まで真っ赤に染まった様子を、隣のテツが無表情に観察している。

知里、とカガクに呼ばれたこの少女はくすくすと笑っている。

「知り合いか」

「同級生よ!黙ってて!」

肩ほどまで伸びた髪、カチューシャで広げた前髪、七草^{ななくさ}知里^{ちり}。そ

れが彼女の名前だ。

「そっかそっか、とうとう漣さんも男の子に対する免疫が付いてきたのね」

「ちっ、違う！そんなんじゃないで、本当にこいつはただの親戚で」
「大丈夫大丈夫、私は口堅いほうなの」

何とか言い訳をしようとするカガクの言葉を変な方向へ解釈していく知里。思い込みの激しいタイプだ。

「やわらかそうに見えるが」

「黙っててって！」

「ふふ、面白い人！。私 ななくさ 七草 知里。よろしくね」

「俺は漣 テツ」

「へえー、同じ苗字なんだ」

知里はテツの顔を興味深げに眺めた。

それからテツとカガクの顔を数度見比べ、何か含んだような笑みを浮かべた。

「それじゃ、漣さん。また学校で」

素早く自転車にまたがると、知里は軽く地面を押した。自転車のスタンドがガチャンと音を立てて上がる。

「あ、ちよつと！知里…」

さっさと自転車は遠ざかっていく。それを追いきれないカガクの右手がわなわなと震えていた。

「…変な誤解が……」
「？」

いまいち状況の理解しきれないテツが首をかしげていると、涙目になりながら彼を睨んだカガク。

「あんたのせいよ！もう絶対あんたとは一緒に歩かない！」

「そうか。自由にしてくれ」

「この……」

まるで意に介さないテツはすたすたと歩いていった。カガクはなんだか自分がとても子供のような気がして悔しさに唇を噛んだ。彼女は大またにテツに近づくと、

「言つとくけど！本当に迷惑して」

「一緒に歩かないんだろう？」

「あ……も、もういいの！」

「そうか」

夕暮れの影は伸び、空は赤色から藍色へ。夜になっていく。

第9話 「幼馴染」(後書き)

轍とカガクと辿子の3人の幼馴染。どう動くか…次回、お楽しみに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4667e/>

Feマン

2010年10月9日03時16分発行